

〈史料紹介〉

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著 『高貴なる用語の解説』 訳注 (11)

谷 口 淳 一 編

はじめに

本稿は、アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー (Aḥmad Ibn Faḍl Allāh al-'Umari) 著『高貴なる用語の解説』 (*al-Ta'rif bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf* 以下『高貴なる用語』と略) のアラビア語原典からの日本語訳注である。本稿では、al-Droubi の校訂本251頁15行目から272頁9行目までのテキストに対する訳注を掲載する。著者および本書とそのテキストなどに関しては、訳注(1)の「はじめに」を参照されたい。

今回訳出した部分は、前回から続く第5章の残りの部分と第6章の初めの部分に相当する。「第5章 各州の領域と、そこに付随する都市、城塞、村落」の残りの部分は、シリアの地域区分と各地の主要地名の説明である。シリア全体の概要が示されたあと、まず、シリア地方 (Bilād al-Šām) すなわちダマスカス州 (Mamlakat Dimašq) が、ダマスカス近郊 (barr) とそれ以外の4区域 (šafaqa) に分けて説明される。そのあと、アレッポ地方 (Bilād Ḥalab)、ハマー地方 (Bilād Ḥamā)、トリポリ地方 (Bilād Ṭarābulus)、サファド地方 (Bilād Šafad)、カラク (al-Karak) が取り上げられている。なお、ヒジャーズは、マムルーク朝の支配が確立していないとして説明が省かれている。

この章では、各地方や区域ごとにそれぞれの東西南北の境界が示されたあと、そこに含まれる都市や村、城塞などの地名が列挙され、適宜説明が加えられる。その説明において wilāya という用語が頻出するが、その多くは、拠点となる都市や城塞から派遣されたワリー (wālī 代官) が担当する場所という意味で用いられている。このような意味であると判断した wilāya については、原則として「管轄地」と訳した。

つづく「第6章 宿駅と伝書鳩の拠点、氷雪を運搬するラクダと船の拠点、烽火台、焼却場」のうち、本稿に収められているのは、宿駅すなわち駅通 (barīd) に関する記述の前半部である。ここでは、古代からマムルーク朝に至る駅通制度の歴史が紹介されたあと、カイロからエジプト各地へ至る駅通路が宿駅を辿りながら説明されている。なお、『高貴なる用語』の上記2章については、Richard Hartmann の詳細な訳注があり、訳文の検討や地名の比定に際してとくに参照した。

以上が、本稿で訳出した範囲の概要である。なお、以前訳出した『高貴なる用語』の目次 [訳注(1): 31頁] と本稿では、章題に含まれる一部の用語の訳が異なっている。これは、各章の内容を検討した結果、当該用語の訳を変更したためである。

我々は、2003年7月から「イスラーム世界における書記とその伝統研究会」と称して、1年間に10回程度の研究例会（輪読会）を開催し、『高貴なる用語』を読み進めてきた。今回の公刊部分は、2019年1月から2020年3月にかけて実施した計12回の例会（第166回～第177回）で読んだ部分に相当する。この期間の研究例会で訳注作成を担当したのは、伊藤隆郎、岡本恵、近藤真美、杉山雅樹、辻大地、柳谷あゆみ、横内吾郎（五十音順）と谷口の8名であるが、さらに篠田知暁が編集作業に携わった。各担当者が作成した訳注を例会で検討し、その修正案を研究会参加者に再度示して意見を求め、必要に応じて修正を重ねた。訳語や表記の統一と最終的な調整および「はじめに」の執筆は谷口が担当した。

訳文中にある〔 〕は、校訂およびその底本であるL写本の頁の表示と、校訂テキストにない語句を補って訳した場合に用いた。また、用語の原語をローマ字で表記する際には、原則として辞書の見出しとなる形（名詞と形容詞は単数形主格、動詞は完了形3人称男性単数）に直して示した。ただし、章節題の表示、単数形にすると意味が変わってしまう語句などは、原文の形に即して転写した。

我々の研究会は、2018年度より科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般）「13-15世紀におけるアラビア語文化圏再編の文献学的研究」（代表者佐藤健太郎、課題番号18H00719）の一研究班として活動しており、本稿はその研究成果の一部でもある。

『高貴なる用語の解説』(11)

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリ

[txt. 251; ms. 110a]

シリア¹⁾

シリアの南側全体は荒地に接しており、それはイスラエルの民の荒野（Tih Banī Isrā'īl）、ヒジャーズの地（Barr al-Ḥiǧāz）、イラクにおけるユーフラテス川流域に至るサマーワ²⁾である。これらの境界地（muḥadd）は、すべてアラビア半島の一部である。東側全体は、サマーワの諸道とユーフラテス川に接している。北側は、地中海（al-Baḥr al-Šāmī）に接している³⁾。西側は、[txt. 252] 前述のエジプトの境界に接している。以上の境界〔の説明〕は

-
- 1) al-Šām. この語の本訳における訳し分けの原則は、次の通り。この語がシリア全域を指す場合は「シリア」、ダマスカスとその周辺地域を指す場合は「シャーム」と表記する。なお、原文に Dimašq とある場合は、「ダマスカス」と記す [訳注 (3) : 31頁注76]。
 - 2) al-Samāwa. クーフアとダマスカスの間に広がる砂漠の名称。現在、クーフアから100km 余りユーフラテス川を下った地点に存在するサマーワ市は、11/17世紀以降存在が確認される比較的新しい都市である [研究篇 : 246頁 ; “al-Samāwa,” *Buldān* (v. 3 : 131); “al-Samāwa,” EI2]。
 - 3) シリアについてもエジプトと同様に地中海が陸の北側に位置するとされている。この後の部分でも、実際の方角から時計回りに数十度ずれた方角の記載がみられる。このような方角のずれは、前近代の西アジアに関する地誌ではしばしばみられる。

〔最低限〕必要なもののすべてである。それをさらに細かく論じる場合は、説明を追加する必要がある。

さて、我々は以下のように述べよう。人々はシリアに関して様々な説を持っている。シリアは単一のシリア (Šām waḥid) だけであると考える者と、複数のシリア (Šāmāt) があると考える者がいる。後者は、パレスチナ地方 (Bilād Filasṭīn) および聖なる地⁴⁾からヨルダン⁵⁾の境界までを一つのシリアとし、それを上シリア (al-Šām al-A'lā) と呼ぶ。そして、ダマスカスおよびダマスカス地方を一つのシリアとする。ダマスカス地方とは、ヨルダンからティワール (al-Ṭiwāl) という名で知られる山地に至る。ティワールは、ナブク村 (Qaryat al-Nabk) とその境界地帯に位置する。そして、スーリーヤ (Sūriyā), すなわちヒムスおよびラフバト・マーリク⁶⁾に至るヒムス地方を一つのシリアとする。彼らはハマー (Ḥamā) とシャイザル (Šayzar) をスーリーヤの附属地の一部とするが、シャイザルは除外してハマーだけをそのように考える者もいる。そして、キンナスリーン (Qinnasrīn) とキンナスリーン地方およびアレppoを一つのシリアとする。それは、この〔方面〕の境界内にあり、ルームの山地 (Ġibāl al-Rūm), アワースィム地方 (Bilād al-'Awāšim), スグール (al-Ṭuġūr) つまりスイス地方 (Bilād Sīs) に至る地である。

アッカー ('Akkā) [ms. 110b] とトリポリ (Ṭarābulus) および海岸沿いの場所すべてについては、そこが複数のシリアのいずれかに面している場合、そのシリアの一部とされる。

我々は、この点すべてを周知するためにとくに記した。

我々の時代で、我々の官庁の規則の下にあるところについて言うと、我々のスルターンが「シリア地方」(Bilād al-Šām) 及び「シリアのナイーブ」(nā'ib al-Šām) と言ったときは、ダマスカス及びそのナイーブのみを意味する。そしてその管轄地 (wilāya) はエジプト地方の境界のアリーシュから北東のサラミーヤ⁷⁾の果てまで、そして真東のラフバまでである。我々のスルターンの治世においては、それにジャーバル⁸⁾地方が加わったが、ジャーバル地方は本来はアレppoとともにある。以上をもって、ダマスカス州 (Mamlakat Dimašq) は [txt. 253] 上シリアとその隣接地、さらにそれらの隣接地と下シリア (al-Šām al-Adnā) の一部を含むことになる。ダマスカス州について上記から除外されているのは、ハマーと、サファド⁹⁾やトリポリとともに除外されたところ、および特別扱いとされたところ (ifrādāt-

4) al-Arḍ al-Muqaddasa. エルサレムとその周辺地域を指す [訳注(5): 16頁注93]。

5) al-Urdunn. 元来、ヨルダンとは、ヨルダン河谷とその周辺を指す地域名であり、現在のヨルダン王国の領域とはかなり異なる [Le Strange 1890: 30-32]。

6) Raḥbat Mālik. ユーフラテス川中流右岸、現在の al-Mayādīn 市に位置し、交通の要衝として栄えた都市。都市の建設者の名を付して Raḥbat Mālik b. Ṭawq と呼ばれた ["al-Raḥba," EI2]。

7) Salamiya. ヒムスから2日行程にある町で、砂漠に隣接している [研究篇: 246頁; Le Strange 1890: 528]。

8) Ġa'bar. ユーフラテス川中流域左岸にあった城塞。マムルーク朝期には一度放棄され荒廃したが、14世紀前半ナスィル治世の末期に城塞が再興された [研究篇: 247頁; "Dja'bar or Ġal'at Dja'bar," EI2]。

9) Ṣafad. Ṣafat とする地誌もある。カナン山頂の城塞及び町の名前。十字軍によって一時支配さ

hu) と、カラク¹⁰⁾である。シリア (ダマスカス州) のナーイブ管区 (niyāba) の中には、ガザのナーイブ管区、ダマスカスのナーイブ管区、ヒムスのナーイブ管区、そして本来はアレppoのナーイブ管区にあるべきものの一部がある。

我々は、現況通りにそのことを述べる。したがって以下のことを知るように。

シリアのナーイブ管区は近郊 (barr) と四つの区域 (ṣafqa)¹¹⁾の管轄地を含む。「近郊」とはダマスカスの周辺部 (daḥīya) を指す。その南側の境はクスワ¹²⁾に隣接するヒヤーラ¹³⁾村とそこから東西に延びる線 (samt) である。東側の境はティワール山地からナブクにかけてと、その線上に位置するものである。北側の境は、ナブクからアッサーール¹⁴⁾へと至る線上の村々とアッサーール周辺のザバダーニー¹⁵⁾までの村々である。西側は、ザバダーニーから前述のヒヤーラの対面のキラーン¹⁶⁾の村々である。[ms. 111a] 以上の中にダマスカスの草原地帯 (marḡ) とグータ¹⁷⁾が含まれる。

諸区域¹⁸⁾

第1の区域は、沿岸地域と山岳地域である。この地方の主邑はガザの街であり、そこにはナーイブ職が置かれている。ガザのナーイブは、この区域についてシリアのナーイブに相談する。第1の区域ではワーリーの任免はシリアのナーイブが行う。しかし、カルタイヤー¹⁹⁾、バイト・ジブリール²⁰⁾、[txt. 254] ダールーム²¹⁾のみは²²⁾ガザのナーイブがワーリーを任命する。この区域は上シリアに相当するが、ヨルダン川からカークーン²³⁾の境の端までは含まれ

れたが、664/1266年にマムルーク朝のバイバルスによって征服された [Le Strange 1890: 524–525; “Ṣafad,” EI2]。

- 10) al-Karak. アンマンの南、死海の東に位置する城塞 [研究篇: 247頁; “al-Karak,” EI2]。
- 11) barr および ṣafqa の両語については、文脈にふさわしい語義を辞書からは見出せていない。それぞれの「近郊」「区域」という訳語は、文脈から推定したものである。
- 12) al-Kuswa. al-Kiswa とする地誌もある。ダマスカスの南方に位置する村 [研究篇: 247頁; Le Strange 1890: 488]。
- 13) al-Ḥiyāra. ヒッティーン及びタバリーヤ近郊の村 [研究篇: 247頁; Le Strange 1890: 451]。
- 14) ‘Assāl. 研究篇ではダマスカスとバルバックの間に位置する Ḡubbat ‘Usayl であろうと推測している [研究篇: 247頁; Le Strange 1890: 466]。
- 15) al-Zabadānī. ダマスカスとバルバックの間、バラダー川岸にある町 [研究篇: 247頁; Le Strange 1890: 553]。
- 16) al-Qirān. 研究篇247頁では *Nuḥba* [198] に言及があると解説されており、同書198–199頁に記載は確認できるが、ダマスカス周辺の地名として列記されているのみである。
- 17) Ḡūṭa. ダマスカス市街の東方から南方にかけて広がる地域。古来よりバラダー川の水を利用した農業で知られる [“Ḡhūṭa,” EI2]。
- 18) al-ṣafaqāt.
- 19) Qartayyā. パレスチナ地方バイト・ジブリール近郊の村 [研究篇: 247頁; Le Strange 1890: 480]。
- 20) Bayt Ḡibrīl. Bayt Ḡibrīn とする地誌もある。エルサレムとアスカロンの上に位置する町 [研究篇: 248頁; Le Strange 1890: 412–413]。
- 21) al-Dārūm. ガザからエジプトに至る道中にある城塞 [研究篇: 248頁; Le Strange 1890: 437]。
- 22) 校訂本ではこの箇所は *laysa illā* から始まっているが、そのままでは文意が不明なので *laysa* を含まないペイルート版226頁に従って訳した。
- 23) Qāqūn. パレスチナ地方ラムラ近郊の城塞 [研究篇: 248頁; Le Strange 1890: 475]。

ない。

この州の周縁で、栄光に満ちた支配のもとにある領域は以下の通りである。山岳地域には我らの主人である神の親友（イブラーヒーム）——彼に祝福と平安があらんことを——の町（ヘブロン）がある。ヘブロンはガザに最も近い町である。それから高貴なるエルサレム、さらにナーブルスがある。そして沿岸地域はガザの街の管轄地である。それからパレスチナのラムラ²⁴⁾があり、ルツド²⁵⁾、さらにカークーンがある。

第2の区域は、南区域（al-Qibliya）という名で知られている。この区域がダマスカスの南方に位置するがゆえに、そう名付けられたのである。その南側の境界は、ヨルダン溪谷²⁶⁾〔を取り囲む〕山地の南部であり、そこはバヌー・アーミル草原²⁷⁾に隣接している。東側の境界は、砂漠（barriya）である。北側の境界は、ダマスカス近郊の管轄地の南側の境界である。西側の境界は、シャキーフ地方²⁸⁾へといたる溪谷地帯（agwār）である。この区域の首邑は、ボスラ²⁹⁾である。ボスラにはダマスカスの城塞のような城塞がある³⁰⁾。ボスラは、アイユーブ家の王の居所（dār mulk）の一つであった³¹⁾。この区域全体を支配するワーリーの居所（maqarr al-wilāya）は、〔今は〕アズリアート³²⁾にある。かつて、その居所は別の場所にあった。

この区域の南の端は、バルカー³³⁾〔地方〕である。その首邑は、〔ms. 111b〕フスバーン³⁴⁾

24) al-Ramla. パレスチナ地方の都市。エルサレムの西北西に位置し、初期イスラーム時代に軍营地となった。ウマイヤ朝ワリード1世の治世には、疫病の流行によりパレスチナの首府がルツドからラムラに移された〔研究篇：248頁；“al-Ramla,” EI2〕。

25) Ludd. 古代パレスチナの首邑。ヤッフアの南東に位置する〔研究篇：248頁；Le Strange 1890: 493; “Ludd,” EI2〕。

26) al-Ġawr. ティベリアス湖からヨルダン川を経て死海へと達する低地地帯。上流のティベリアス湖で海拔マイナス208mを記録し、死海（海拔-394m）までの約100kmをゆるやかに下っていく。東西の幅は、北方では12kmを超えることはないが、死海の近くでは20kmに達する〔“al-Ghawr,” EI2〕。

27) Marġ Banī ‘Āmir. Marġ Ibn ‘Āmir と呼ばれる。イスラエル北部地区に広がるイズレエル平野のこと〔Hartmann 1916: 25〕。

28) Bilād al-Šaqif. al-Šaqif とは、Šaqif Arnūn の名で知られるレバノン南部の十字軍城塞のこと。十字軍側の史料では Belfort あるいは Beaufort と呼ばれる〔研究篇：248頁；Šubḥ, v. 4: 154; Le Strange 1890: 534-535; Humphreys 1977: 77〕。

29) Buṣrā. シリア南部、ハウラーン地方の都市〔研究篇：248頁〕。

30) この城塞は、ローマ帝国時代に建設された劇場を基礎として、イスラーム時代に要塞化されたものである。一辺の長さは100メートルを超えており、その規模はダマスカスの城塞に匹敵する〔“Boṣrā,” EI2; Burns 1992: 61-68〕。

31) 例えば、ダマスカスのアイユーブ朝君主 al-Šāliḥ ‘Imād al-Dīn Ismā‘il（在位635/1237-38年、637-643/1239-1245年）は、君主の座につく前に父アーディル1世によってボスラをイクターとして与えられ、20年ほどこの地を支配した〔Humphreys 1977: 186, 232; “al-Šāliḥ ‘Imād al-Dīn,” EI2〕。

32) Adri‘āt. シリア南部、ハウラーン地方の都市。現在のダルアー〔研究篇：248-249頁；“Adhri‘āt,” EI2〕。

33) al-Balqā'. ヨルダンの一地域の名称。厳密に定義されていないが、通常は南北をムジープ川とザルカー川に挟まれた石灰岩台地を指して使用される〔“al-Balkā’,” EI2〕。

34) Ḥuṣbān. あるいは Ḥisbān. ヨルダンの首都アンマンの南西に位置する都市。『旧約聖書』に登場するヘシボンに同定される。ローマ・ビザンツ帝国時代においても、主教が置かれる地域の

である。〔バルカーに〕次いで、サルト³⁵⁾がある。次いで、アジュルーン³⁶⁾〔地方〕とアウフ山 (Ġabal ‘Awf) がある。アジュルーン的首邑は、バーウーサ³⁷⁾である。アジュルーンとは、バーウーサを見下ろすアウフ山に建てられた城塞の名である。アジュルーンはその小ささにもかかわらず、栄光に満ちた砦であり、難攻不落である。〔txt. 255〕次いで、アズリアートがある。アズリアートには、〔南区域のワーリーとは別に〕そこだけを担当するワーリーがいる。

この区域の境界の東の端は、サルハド³⁸⁾である。サルハドには城塞がある。かつて、ムアッザミー・マムルーク³⁹⁾の一人がこの地の統治を任されていた⁴⁰⁾。〔今では、〕時として、王 (スルターン) あるいは偉大なる〔シリアの〕ナーイブによって置かれた人物がこの地に任じられる。サルハドはボスラと接している。次いでズラー⁴¹⁾があり、アズリアートがある。ボスラ地区 (‘Amal Buṣrā) は、ズラーが北方に入りこんでいるがために、アズリアートの南部と接する。ズラーは、西方でナワー⁴²⁾と接している。ナワー地区の一部はアズリアートへと達している。ナワーは、北西でシャーラー⁴³⁾地方と接している。この地方のワーリーは、ある時にはハーン⁴⁴⁾村に居り、ある時にはクナイティラ⁴⁵⁾村に居る。シャーラー地方には、北西でバーニヤース⁴⁶⁾が接している。バーニヤースにはスバイバ (al-Ṣubayba) 城塞がある。この城塞は最も栄光に満ちた城塞の一つであり、その一帯の最も高いところに建っている。

以下のことを知るように。渓谷地帯は、カラクに帰属する地を除いて、そのすべてがこの

中心都市であった〔研究篇：249頁；Le Strange 1890: 456；「ヘシボン」『旧約新約聖書大事典』〕。

- 35) al-Ṣalt. アンマンの西方に位置する都市〔研究篇：249頁〕。
- 36) ‘Aġlūn. 南北をザルカー川とヤルムーク川に挟まれたヨルダンの一地域の名称。本文で後述されるように、この地に建設された城塞の名称としても知られる。〔“‘Adjlūn,” EI2〕。
- 37) al-Bā‘ūta. ベイルート版228頁および *Ṣubḥ* [v. 4: 106] は al-Bā‘ūna とする。Hartmann 1916 [26] によれば、アジュルーン城塞の北辺に Bā‘ūn という名の村が存在する。
- 38) Ṣarḥad. シリア南部、ハウラーン地方の都市〔研究篇：249頁〕。ボスラの約20km 東に位置する。
- 39) al-Mamālik al-Mu‘azzamiya. ダマスカスのアイユーブ朝君主 al-Mu‘azzam Ṣaraf al-Dīn ‘Īsā (在位615~624/1218~1227年) 子飼いのマムルーク〔研究篇：249-250頁；Hartmann 1916: 27〕。
- 40) 前述の al-Mu‘azzam Ṣaraf al-Dīn ‘Īsā は、自身のマムルークである ‘Izz al-Dīn Aybak (646/1248-49年没) にサルハドをイクターとして与えたが、Aybak は al-Mu‘azzam の死後も長くサルハドのムクターであり続けた〔研究篇：250頁；“Aybak,” EI2; Humphreys 1977: 186, 291-292〕。
- 41) Zura'. シリア南部、ハウラーン地方の都市。現在のイズラー〔研究篇：250頁；Hartmann 1916: 27〕。ダルアーの北北東約30km に位置する。
- 42) Nawā. シリア南部、ハウラーン地方の都市〔研究篇：250頁〕。ダルアーの約30km 北、イズラーの約20km 西に位置する。
- 43) al-Ṣārā. Hartmann 1916 [27] によれば、当時、クナイティラ北西の森林地域にシャーラーの名が残っていた。
- 44) Ḥān. 詳細不明。研究篇250頁および Hartmann 1916 [27] は、Bayt Ġān (バーニヤースと Dārāyā の間にある村 [Le Strange 1890: 412]) の誤りである可能性を指摘している。
- 45) al-Qunayṭira. ダマスカスの南西に位置する都市、あるいは地域〔研究篇：250頁〕。ナワーの北西約25km に位置する。現在クナイティラは、中東戦争を経て廃墟と化している。
- 46) Bāniyās. ヘルモン山の南麓、クナイティラの北西約25km に位置する都市。ダマスカスとエルサレムの間位置するため、十字軍時代には戦略的な重要性が高まり、十字軍とムスリムとの間で何度も支配者が入れ替わった〔研究篇：250頁；“Bāniyās,” EI2〕。

区域に属している。この区域に帰属するヨルダン溪谷の首邑は、バイサーン⁴⁷⁾である。バイサーンにはワーリーの居所がある。

以上が、南区域のすべてである。

第3の区域は、北区域 (al-Šamāliya) という名で知られている。その南側の境界は、ダマスカス近郊の管轄地の北側の境界および西側の境界の一部である。東側の境界は、ジュースィヤ⁴⁸⁾村である。この村はヒムス地区にあるカサブ⁴⁹⁾の名で知られる村とバーラバック (Ba'labakk) 地区にあるラフィーカ⁵⁰⁾の名で知られる村の間にある。北側の境界は、アサル草原 (Marğ al-Asal) である。そこは、[ms. 112a] オロンテス川 (Nahr al-Urunṭ), すなわちアースィー川 (al-Āṣī) が流れており、カーイム・アルヒルミル⁵¹⁾から区切られている。また、[txt. 256] レバノン山脈 (Ġabal Lubnān) から北へと向かって海へと至るすべての土地のうち、トリポリに属する地方〔が北側の境界〕である。西側の境界は、スール⁵²⁾からダマスカス近郊の管轄地の南と西の境界までの、海〔とダマスカス近郊を結ぶ〕線である。

北区域には、栄光に満ちた都市の一つ、バーラバックがあり、バーラバックには地上の最も栄光に満ちた建物の一つである、栄光ある堅牢な城塞がある。ダマスカスの城塞の方がそれをまねて建てられたのだが、いうまでもなく、ダマスカスの城塞などはバーラバックの城塞と並ぶものには数えられない。ダマスカスの城塞とバーラバックの城塞の間にはなんと大きな違いのあることか。バーラバックの城塞の石はどっしりと聳えているその山脈であり、その柱はそそり立つ岩である。

時に物事は似たものであっても大いに異なる

天は青きにおいては水に似る⁵³⁾

バーラバックは代々続いた王の居所であり、栄光をもって人口に膾炙し、重要であることがよく知られた〔場所〕であった。ここから、アイユーブ家の王たちの祖、ナジュム・アッディーン・アイユーブ⁵⁴⁾は巢立っていったのである。

47) Baysān. ヨルダン川の西岸に位置する都市。対岸に位置するアジュールン城塞を目視することができる [Le Strange 1890: 389, 410–411]。現在のベト・シェアン。

48) Ġūsiya. ヒムスからダマスカス方面に向かって6ファルサフ(約36km)の距離にある村 [“Ġūsiya,” *Buldān*]。

49) al-Qaṣab. ジュースィヤ村に隣接する村。バーラバックからヒムスへ行く際に、最初にカサブへ向かうこととなる [Ṣubḥ, v. 14: 382]。

50) al-Lafika. Hartmann 1916 [28] は J. L. Porter の記述などを参照して、これと al-Fika が同一である可能性を提示している。Porter は、Labwa から Ra's Ba'labakk へと向かう途上で、オロンテス川の右岸に Fikeh 村の存在を記録している [Five Years, v. 2: 323]。

51) Qā'im al-Hirmil. ジュースィヤと Ra's Ba'labakk の間に位置する地名 [研究篇: 251頁]。

52) Ṣūr. レバノン南部の港市。もとは島に作られたフェニキア人の植民都市であったが、アレクサンドロス大王による征服の際に島と陸地を繋ぐ堤がつくられ、陸続きとなった。518/1124年以降、十字軍勢力の支配下に置かれたが、マムルーク朝スルターン＝ハリールが690/1291年に征服し、街を破壊した [“Ṣūr,” EI2]。

53) Abū al-'Alā' al-Ma'arrī (449/1058年没) による詩の一節 [研究篇: 251頁]。

54) Nağm al-Dīn Ayyūb b. Šādī. 568/1172–73年没。サラフ・アッディーンの子。セルジューク朝のもとでタクリートを治め、後にザンギー朝に仕えるようになった。彼とバーラバックと

バーラバックには、そこだけを担当するワーリーがいる。また、その附属地には栄光に満ちた二つの管轄地がある。即ち、ビカー・バーラバックキー地区 ('Amal al-Biqā' al-ma'rūf bi-al-Ba'labakkī) と、ビカー・アズィーズィー地区 ('Amal al-Biqā' al-ma'rūf bi-al-'Azīzī) である。前者にはワーリーの居所はなく、ワーリーの居所は後者にあるカラク・ヌーフ⁵⁵⁾の名で知られているカラクである。それら二つの管轄地は、現在ではバーラバックからは切り離されており、1名の栄光に満ちたワーリー自らのもとに統合されている。

さらに、バーラバック地方は北西で、栄光に満ちた地区であるベイルートに接している。ベイルートの街はシリアの〔海に面した〕境域 (taḡr) であり、シリアにおけるベイルートは、エジプトにおけるアレクサンドリアに相当する。ベイルート地方はサイダー⁵⁶⁾地方に隣接している。サイダー地方は、栄光に満ち、地区が広く、〔ms. 112b〕村々が連なる管轄地である。

以上が、北区域の全てである。

第4の区域は東区域 (al-Šarqīya) であり、その南の境界は、ジュースィヤ村の隣にあるカサブ村であり、両村については既に述べた。この境界は、ナブクからカルヤタイン⁵⁷⁾に向かっている。東の境界はユーフラテス川に至るサマーワで、〔txt. 257〕サラミーヤの街まで続く。サラミーヤには街に隣接する形で城塞があり、シュマイミス (Šumaymis) の名で知られている。また北の境界は、サラミーヤからラスタン⁵⁸⁾までのところである。そして西の境界はオロンテス川、即ちアースィー川である。この区域の主邑はヒムスで、そこはアサド家⁵⁹⁾出身の王の居所であり、アイユーブ朝期、その王は〔周囲から〕恐れられる影響力と警戒される権勢を保ち続けた。ヒムスには、〔城塞が建つ丘の斜面に〕石の貼られた⁶⁰⁾城塞があるが、この城塞は防衛力に欠ける。また、ヒムスには栄光に満ちたナーイブが任じられて

の関係は、534/1139-40年にイマード・アッディーン・ザンギーから同地の統治を委ねられたことに始まる。549/1154年、彼はバーラバックをブーリー朝のダマスカス領主の手に明け渡したが、それと引き換えに、ダマスカス近郊の村落を手に入れ、ダマスカスへと居を移した [Rawḍatayn, v. 1: 219, 173-174; Wāfi, v. 10: 47-51; "Ba'labakk," "Ayyūbids," EI2]。

55) Karak Nūḥ. レバノン山脈の麓に位置する村で、預言者ノア (ヌーフ) の墓とされるものがある ["Karak Nūḥ," EI2]。

56) Šaydā. スール北方の港湾都市。504または505/1110-12年にフランクの手に渡って以後、ムスリムとフランクの支配が繰り返され、最終的には690/1291年に、マムルーク朝の支配下に入った ["Šaydā," EI2]。

57) al-Qaryatayn. ダマスカスとタドムルのほぼ中間、タドムルから2日行程に位置する大きな村。ヤークートは、住民はみなキリスト教徒であると述べる ["Qaryatāni," *Buldān* (v. 4: 77-78)]。

58) al-Rastan. ハマーとヒムスの間に位置し、オロンテス川に面する町 [Le Strange 1890: 519-520]。

59) al-Bayt al-Asadī. ナジュム・アッディーン・アイユーブの弟 Asad al-Dīn Šīrkūh (564/1169年没) の一族のこと。ザンギー朝による第1回エジプト遠征 (559/1164年) の後、彼はザンギー朝君主ヌール・アッディーンから、ヒムス、ラフバ、タドムルをイクターとして得た ["Ayyūbids," "Himṣ," EI2]。

60) muṣaffaḥa. ヒムスの城塞は直径300メートル弱の小高い丘の上に建てられており、敵が登りにくいようにその部分に石が貼られていた [Hartmann 1916: 30, n. 6; "Himṣ," EI2]。

おり、軍団を有している。この区域は、ヒムスの南にあるカーラー⁶¹⁾管轄地と、ヒムスの街自体の管轄地、サラミーヤ管轄地、カルヤティンとラフバの間にあるタドムル⁶²⁾管轄地で構成されている。この区域にはユーフラテス川に面してラフバの街がある。ここには城塞があり、ナーイブが任じられている。また、バフリー・マムルーク軍⁶³⁾、騎士団 (ḥayyāla)、諜報活動者、スルターンの子飼いではないマムルーク (mustahdam) の部隊が置かれている。

以上が東区域のすべてであり、これをもって〔シリアの〕四つの区域〔の説明〕を終える。

シリアの附属地の中で残っているのは、ジャーバルのみである。この街は改築され、現在も〔まだ〕新しい。「永遠がそれに勝り、ルバド⁶⁴⁾に死をもたらしめたものがそれを荒廃させた」⁶⁵⁾後、数年前に改修されたばかりだからである。ジャーバルに言及したことによって、現在我らのスルターンが発する言葉や彼が発行する文書の中で「シリア」という用語によって示されるものの説明を終える。〔ms. 113a〕

アレppo地方⁶⁶⁾

アレppo地方については、その南側で境界になっているのは、マアツラ⁶⁷⁾、〔マアツラから〕荒廃した集落跡とルームの〔遺跡の〕連なり⁶⁸⁾に至る線上に位置するもの、ヒヤール⁶⁹⁾と

61) Qārā. ヒムスの60km余り南に位置する村。ヒムスからダマスカスへ向かう最初の宿駅にあたる。ヤークートは、住民は全てキリスト教徒であると伝えている [“Qāra,” *Buldān*; Le Strange 1890: 478]。

62) Tadmur. シリア砂漠北部、ヒムスの東約150kmに位置するオアシス都市。パルミラ。旧約聖書では、ソロモン王が建てた街として登場する [“Tadmur,” *Buldān*; “Tadmur,” EI2; Le Strange 1890: 540–542]。

63) Bahriya. スルターンによって購入された後に教育・訓練を受けた兵舎がナイル川 (バフル) のローダ島にあったためこのように呼ばれた [Hartmann 1916: 30–31, n. 10]。

64) Lubad. イスラーム以前の伝承において、神が賢者ルクマーン・ブン・アード (Luqmān b. ‘Ād) に授けたとされる7羽のワシのうち、最後のワシの名前。ルクマーンは長寿の象徴であるワシを1羽ずつ順に育て、7羽目のワシであるルバドの死と共に亡くなったとされる。彼の寿命については、560年から3500年まで諸説ある [“Luqmān,” EI2]。

65) イスラーム以前のアラブ詩人 al-Nābīga al-Dubayānī (604年頃没) の詩をもとにしている [研究篇: 253頁]。

66) Bilād Ḥalab. 校訂では見出しの形になっていないが、他の項目に準じた。

67) al-Ma’arra. アレppoの南西約70kmに位置するマアツラト・アンヌーマーン (Ma’arrat al-Nu’mān) のこと。アレppoとハマートをつなぐ街道上に位置し、オリーブやイチジク、ピスタチオなどの栽培でも知られる肥沃な土地である [“Ma’arrat al-Nu’mān,” EI2; Le Strange 1890: 95–497]。

68) al-silsila al-Rūmiya. マアツラト・アンヌーマーンの西にあるザーウィヤ山 (Ġabal al-Zāwiya) の麓に複数存在する、古代の村落群や神殿跡、キリスト教教会跡を指すか。このザーウィヤ山を中心とする地域は、アレppoの西に位置するスィムアーン山周辺地域とその南西に位置するアーラー山 (Ġabal al-A’lā) 周辺地域と共に、Belus 山地と呼ばれる山地を構成している。この山地に含まれる三つの地域には、それぞれ西暦1世紀から7世紀にかけて建造された多くの住居や建物が廃墟として残されている [Burns 1992: 109–110]。なお、上記の三つの地域に残る遺跡群は、「北シリアの古代村落」として2011年に世界遺産に登録された。

69) al-Ḥiyār. アレppoから2日行程の距離に位置した地方 [Le Strange 1890: 455; 研究篇: 253頁]。

クッバト・ムラーアブ⁷⁰⁾という名で知られた村との間にある古い水路、である。東側で境界になっているのは、バラダー⁷¹⁾を境とする荒野⁷²⁾である。それは円を描くように境界を形成し、[txt. 258] バリーフ [川]⁷³⁾とジュッラーブ川⁷⁴⁾に沿って、バーリス⁷⁵⁾方面に向かいユーフラテス川に至る。この区分によれば、ジャーバル地方はアレppoの境域内に入ることになる⁷⁶⁾。

北側で境界になっているのは、バハスナー⁷⁷⁾の背後に広がるルーム地方と、ジャイハーン川⁷⁸⁾の背後に広がるアルメニア人の国⁷⁹⁾である。西側で境界になっているのは、アルメニア人の国と並んで地中海に至るところである。

アレppoにはいくつもの城塞と管轄地がある。城塞については、[以下の通り]。

ビーラ⁸⁰⁾。その城塞は並ぶものがなく、軍団が配備され、堅固である。そのナーイブは栄光に満ちた地位を有している。

カルアト・アルムスリミン (Qal'at al-Muslimin)。それはカルアト・アッルーム (ルームの城塞)⁸¹⁾という名で知られている。かつてそれはアルメニア人のカリフ⁸²⁾の居所であり、そこには異教の偶像 (ṭāgūt al-kufr) が置かれていた。マリク・アシュラフ・ハリール⁸³⁾

-
- 70) Qubbat Mulā'ab. アレppo地方にあった村と思われるが [研究篇：253頁]、詳細不明。
- 71) Baradā. ヤークート・ハマウィーによればアレppoの東にこの名を持つ村があるというが [“Baradā,” EI2]、詳細不明。
- 72) barr. 校訂では baḥr となっているが、参照した全ての写本の記述に従い barr と読み替えた。
- 73) al-Baliḥ. ハッラーンの北にあるザフバーニーヤの泉 (‘Ayn al-Dahbāniya) を水源とする川。ラッカ付近でユーフラテス川に注ぎ込む [Le Strange 1905: 102–103; 研究篇：253頁]。
- 74) Nahr al-Gullāb. ハッラーンを通過する川 [研究篇：253頁]。バリーフ川に合流する。
- 75) Balis. アレppoとラッカの間にあり、ユーフラテス川西岸に位置する [Le Strange 1890: 417; 研究篇：253頁]。
- 76) ジャーバル地方の帰属については、既に「我々のスルターンの治世においては、それ(ダマスカス州)にジャーバル地方が加わったが、ジャーバル地方は本来アレppoとともにある」という記述がある [本訳：117頁]。ここで著者は、改めてジャーバル地方が本来はアレppo地方に属するという見解を示しているのである。
- 77) Bahasnā. マルアシュ (Mar‘aš) とスマイサート (Sumaysāt) に近い山の頂に築かれた城塞 [Le Strange 1890: 408; 研究篇：253–254頁]。
- 78) Nahr Ġāhān. テキストでは、一貫して Ġayḥān のアルメニア語転訛形である Ġāhān という表記が使用されている [cf. “Djayḥān,” EI2]。しかし、本訳注では混乱を避けるため、「ジャーハーン」ではなく、一般的に広く知られている「ジャイハーン」という表記を採用する。
- 79) Bilād al-Arman. 現在のアルメニアではなく、キリキアのアルメニア王国を指す [訳注 (2)：63頁注69]。
- 80) al-Bira. メソポタミア北西部のユーフラテス川東岸に築かれた城塞。その名は「城塞」を意味するアラム語に由来する [“al-Bira,” “Biredjik,” EI2; Le Strange 1890: 423; 研究篇：254頁]。
- 81) Qal'at al-Rūm. ビーラ城塞の対岸、ユーフラテス川西岸に築かれた城塞 [Le Strange 1890: 475; “Rūm Ḳal'esi,” EI2; 研究篇：254頁]。
- 82) ḥalīfat al-Arman. アルメニア聖使徒教会の首長カトリコスのことか。1148年から1293年まで、カトリコス座はこの城塞に置かれていた [“Rūm Ḳal'esi,” EI2]。
- 83) al-Malik al-Ašraf Ḥalīl. マムルーク朝第8代スルターン (在位689～693/1290～1293年)。十字軍の残存勢力やキリキア・アルメニア王国など、周辺の異教徒に対する遠征を行い、数多くの勝利を収めたことで知られる。691/1292年にはカルアト・アッルームに遠征し、33日間の包囲戦の末、征服に成功した [“Khalīl,” “Rūm Ḳal'esi,” EI2]。

——神が慈悲で彼を包み込まんことを——がそこに遠征し、陣を敷いた。彼はそこを包囲し続け、ついには征服し、それをカルアト・アルムスリミン（ムスリムたちの城塞）と名付けた。それは栄光に満ちた城塞の一つである。

カフター⁸⁴⁾。それは広大な地区と自主的に集まってきた軍団を有している。

カルカル⁸⁵⁾。

バハスナー。それはドゥループ地方⁸⁶⁾と接する境域であり、戦争の熾火が〔今も〕くすぶっている。そこにはトゥルクマーンとクルドの軍団が配備されている。彼らは今もジハードに従事している。ビーラのナーイブには及ばないものの、そのナーイブは栄光に満ちた地位を有する。

アインターブ⁸⁷⁾。それは素晴らしい街である。

ラーワンダーン⁸⁸⁾。〔ms. 113b〕

ダルバサーク⁸⁹⁾。

バグラース⁹⁰⁾。それは、ジャイハーン川流域の征服⁹¹⁾が成し遂げられるまで、アルメニア人の喉元 (naḥr) にあるイスラームの境域であった。また、その川の流域にはルサス⁹²⁾があり、征服地の一部を構成する。

クサイル⁹³⁾。それはアンティオキア⁹⁴⁾に属する。〔txt. 259〕

シュゲルとバカース⁹⁵⁾。この二つは、あたかも一つの〔城塞の〕ようである。

84) al-Kaḥtā. アレッポの北東、マラトヤから東へ2日行程の距離に位置した城塞 [Le Strange 1890: 475; 研究篇: 254頁]。

85) Karkar. アレッポから北へ5日行程、カフター城塞から西へ1日行程の距離に位置した城塞 [Šubḥ, v. 4: 120; 研究篇: 254頁]。

86) Bilād al-Durūb. 黒海とコンスタンティノーブル海峡に挟まれた地域。ルーム地方の別称 [訳注(2): 63頁]。

87) ‘Ayntāb. アナトリア地方南東部の都市で、現在はガズィアンテップ (Gaziantep) と呼ばれる。アレッポとマルアシュをつなぐ南北の街道と、ディヤルバクル (Diyārbakr) とアダナ (Adana) をつなぐ東西の街道とが交差する、戦略上・交易上重要な地点に位置する [“‘Ayntāb,” EI2]。

88) al-Rāwandān. アレッポの北西2日行程の距離に位置した城塞 [Le Strange 1890: 520; 研究篇: 255頁]。

89) al-Darbasāk. キンナスリーン地方の同名の村にある城塞。本文で次に述べられるバグラースの北に位置した [Le Strange 1890: 436–437; 研究篇: 255頁]。

90) Baḡrāṣ. 北シリア内陸部と地中海岸を結ぶ道がルッカーム山地を越える地点に位置する要衝 [訳注(2): 86頁注210]。

91) al-Futūḥāt al-Ġāhāniya. 737/1336年にマムルーク朝スルターン＝ナーシル・ムハンマドによって行われたジャイハーン川中流域および下流域の征服を指す [“Djayḥān,” EI2; 研究篇: 255頁]。

92) al-Ruṣāṣ. ジャイハーン川河岸、ラース・アルヒンズィール山 (Ġabal Ra’s al-Ḥinzīr) の麓にあった城塞。この辺りはキリキア・アルメニア王国とシリアとの境界であった [Le Strange 1890: 519, 523]。

93) al-Quṣayr. アレッポの西にあった城塞 [Šubḥ, v. 4: 123; 研究篇: 255頁]。

94) Anṭākiya. オロンテス川河岸にあり、古代から発展した北シリアの重要都市 [“Anṭākiya,” EI2; 研究篇: 255–256頁]。

95) al-Šuġr wa Bakās. オロンテス川の支流アブヤド川河岸、アンティオキアとアレッポの間に位置し、北の城塞 (シュゲル) と南の城塞 (バカース) が隣り合うように作られていた [Burns

ハジャル・シュグラーン⁹⁶⁾。

アブー・クバイス⁹⁷⁾。

シャイザル⁹⁸⁾。

以上がアレppoの城塞のすべてであり、上述のように並んでいる。ただし、アインターブはその〔帯状の〕領域 (niṭāq) よりも内側にあるが、その位置はバハスナーとラーワンダーンの間にある。神にこそ成功あり。

アレppoの管轄地については、その中で最も栄光に満ちたものはガルビーヤート (al-Ġarbiyāt), すなわちサルミン⁹⁹⁾とそれに付随する地域である。アレppoの全管轄地は以下の通りである。

カファル・ターブ¹⁰⁰⁾。

ファーマーヤ¹⁰¹⁾, すなわちアフーマーヤ。

サルミン。

ジャップール¹⁰²⁾。

スイムアーン山¹⁰³⁾。

アザーズ¹⁰⁴⁾。

タッル・バーシル¹⁰⁵⁾。〔これらは〕前述の城塞には含まれない、管轄地を有するところである。アレppoの街それ自体には、ダマスカス同様に近郊の管轄地がある。以上がアレppo地方のすべてである。

1992: 52-53; Le Strange 1890: 537; 研究篇: 256頁]。

96) Ḥaġar Šuġlan. アンティオキアの北、バグラース近郊のルッカーム山地にあった城塞 [Le Strange 1890: 447; 研究篇: 256頁]。

97) Abū Qubays. 後述するシャイザルの西約25km, ハマーの西北西約45km に位置した城塞。12世紀前半以降、十字軍やイスマール派の支配下に置かれた [Burns 1992: 170-171; 研究篇: 256頁]。

98) Šayzar. オロンテス川河岸, ハマーの北西約20 km に位置した城塞。古くから戦略上の重要拠点とみなされ、ビザンツ帝国や十字軍, イスラーム諸王朝の間で係争地となった [“Shayzar,” EI2; Burns 1992: 219-220; Le Strange 1890: 533-534; 研究篇: 256頁]。『回想録』の著者ウサーマ・イブン・ムンキズの出身地としても知られる [梅田輝世1978: 41頁]。

99) Sarmin. アレppoの南西に位置する城塞 [Le Strange 1890: 532; 研究篇: 256頁]。

100) Kafar Ṭāb. マアッラとアレppoの間に位置する村 [Le Strange 1890: 473; 研究篇: 256頁]。

101) Fāmīya (Afāmīya). ハマーの北部に位置する。前3世紀にセレウコス朝のセレウコス1世によって建設され、その妻アパマ (Apama) の名を取ってアパメアと名付けられた。17/683年にムスリムに征服される。500/1106年以降十字軍勢力下に入るが、544/1149年ヌール・アッディーンによって奪還される。のちにはイスタンブールからメッカへと至る巡礼路途上の町となった [Le Strange 1890: 384; Burns 1992: 46; 研究篇: 256頁]。

102) al-Ġabbūl. アレppo東南東の塩水性湿地帯の側にある村 [Le Strange 1890: 460; “al-Djabbūl,” EI2; 研究篇: 256-257頁]。

103) Ġabal Sim‘ān. アレppoとアフリーンの間に位置する山。ふもとは5世紀の柱頭行者聖シメオンの名を冠した修道院があり、巡礼地となった [Burns 1992: 111-113; 研究篇: 257頁]。

104) ‘Azāz. アレppoの北西, クールース (Qūrūs) の南東に位置する町 [Le Strange 1890: 405; 研究篇: 257頁]。

105) Tall Bāšir. アレppoの北, アインターブ近くにある城塞 [Le Strange 1890: 542; 研究篇: 257頁]。

ハマー地方¹⁰⁶⁾

ハマー地方については、その南側の境界はラスタンとその向かい側であり、サラミーヤとクツバト・ムラーアブの間を通り、川¹⁰⁷⁾の流域と古よりの遺跡に至るまでである。東側の境界は砂漠で、サラミーヤを経てクツバト・ムラーアブより低くなったところまで¹⁰⁸⁾である。北側の境界は、インキラサー¹⁰⁹⁾からマアッラの境界の端までである。西側の境界は、マスマーフ¹¹⁰⁾と教宣の城塞群¹¹¹⁾の附属地である。ハマー地方には、ハマー自体が有する近郊の管轄地とバーリーン¹¹²⁾とマアッラ以外に周辺の領域はない。

トリポリ地方¹¹³⁾

トリポリ地方については、その南側の境界はレバノン山脈で、隣接するアサル草原の、アースイー川が流れているところに伸びている。〔ms. 114a〕東側の境界はアースイー川、北側の境界は教宣の城塞群、西側の境界は地中海である。〔txt. 260〕

トリポリ地方には数々の城塞や管轄地がある。城塞については以下の通りである。

ヒスン・アッカー¹¹⁴⁾。

ヒスン・アルアクラード¹¹⁵⁾。それは栄光に満ちた砦であり、空にも近くそびえ立つ城塞である。トリポリの征服以前には、そこにはナーイブ職が置かれ、軍団が駐屯していた。

バラートゥス¹¹⁶⁾。

106) Bilād Ḥamā.

107) オロンテス川（アースイー川）のことか。

108) 「クツバト・ムラーアブより低くなったところ」（mā istafala ‘an Qubbat Mulā‘ab）という部分は、バイルト版253頁では「…から区切られたところ」（mā istaqalla ‘an…）となっている。

109) Inqirātā. マアッラから見て北側にある最初の宿駅となる場所 [Hartmann 1916: 35]。

110) Maşyāf. ハマーの西、地中海岸とオロンテス川にはさまれた、ルッカム山の東斜面に建てられた城塞。12世紀にダマスカスやアレppoのスナ派勢力から逃れたイスマール派が領有した一連の城塞の一つ [Le Strange 1890: 507; 研究篇: 257頁]。

111) Qilā’ al-Da’wa. ハマーの西、アンサーリーヤ山地（Ġabal al-Anṣārīya）に位置する、イスマール派によって領有された一群の城塞の総称。十字軍、スナ派、イスマール派間での勢力争いの舞台となった [Le Strange 1890: 352; 研究篇: 258頁]。

112) Bārīn. ハマーの南西に位置する町。古くはラファネア（Raphanea）と呼ばれるローマの軍営都市であった [Le Strange 1890: 420; 研究篇: 257頁]。

113) Bilād Ṭarābulus.

114) Ḥiṣn ‘Akkār. トリポリの北東約40km、アッカー山（Ġabal ‘Akkār）に位置する城塞 [Le Strange 1890: 390; 研究篇: 257頁]。

115) Ḥiṣn al-Akrād（クルド人の砦）。ヒムスとトリポリの間、レバノン山脈に連なるカラフ山（Ġabal Karah）山腹に位置する城塞。422/1031年ヒムスの領主がクルド人を入植させ城塞を築き、その後長くクルド人部隊が駐屯したことからこのように呼ばれる。503/1110年十字軍勢力による征服後はヨハネ騎士団に領有され、「騎士の城塞」（Crac des Chevaliers）の名でも知られる。669/1271年バイバルスによって奪還された [Le Strange 1890: 390; Burns 1992: 37–138; 研究篇: 257頁]。

116) Balāṭunus. ラーズイキーヤの南に位置する城塞 [Le Strange 1890: 416; 研究篇: 257–258頁]。

サフユーン¹¹⁷⁾。

教宣の城塞群。すなわちウツライカ (al-'Ullayqa), マイナカ (al-Maynaqa), カフフ (al-Kahf), マルカブ (al-Marqab), カドムース (al-Qadmūs), ハワービー (al-Hawābī), ルサーファ (al-Ruṣāfa), マスヤーフ。マスヤーフはこれらのイスマール派諸城塞の王¹¹⁸⁾の居所であり、これらの城塞の上に立つ高い地位がある。

トリボリの管轄地については以下の通りである。

アントルトゥース¹¹⁹⁾。

ラーズィキーヤ¹²⁰⁾。

ジュッバト・アルムナイティラ¹²¹⁾。

ザンニーイーン地方¹²²⁾。その中にはブシャッリーヤ¹²³⁾とジャバラ¹²⁴⁾がある。ジャバラにはイブラーヒーム・ブン・アドハム¹²⁵⁾——彼に神の慈悲があらんことを——の墓廟 (maqām) がある。

アナファ¹²⁶⁾。

117) Ṣahyūn. ラーズィキーヤの東に位置する城塞。十字軍勢力に支配されるが、584/1188年サラーフ・アッディーンによって征服された。「サラーフ・アッディーンの城塞」(Qal'at Ṣalāḥ al-Dīn) の名で知られる [Le Strange 1890: 526; Burns 1992: 184–186; 研究篇: 258頁]。

118) ラーシド・アッディーン・スイナーン (Rāsid al-Dīn Sinān) (589/1193年没) をはじめとする、シリアにおけるイスマール派 (ニザール派) の指導者たちを指す。同派については、訳注 (9) 40頁を参照のこと。

119) Anṭartūs. トリボリの北の地中海岸に位置する町。今日のタルトゥース。495/1102年に十字軍の支配下に入り、690/1291年のマムルーク朝による最終的な駆逐まで十字軍勢力の拠点となった [Le Strange 1890: 394–395; 研究篇: 258頁]。

120) al-Lādiqiya. シリア北部の海岸にある都市。古代よりシリア地域の港市として重要視された。ビザンツとムスリムの間で帰属が争われたが、490/1097年には十字軍に奪取される。583/1188年サラーフ・アッディーンに征服されアレppoの支配域に入るも、660/1260年には再び十字軍に奪われる。686/1287年スルターン=カラーウーンの時代に再度ムスリムの支配下に入った [Le Strange 1890: 490–492; Burns 1992: 143–144; 研究篇: 258頁]。

121) Ġubbat al-Munaytira. トリポリ近隣にある城塞 [Le Strange 1890: 509; 研究篇: 258頁]。

122) Bilād al-Ḍanniyin. マスヤーフとアファーミーヤの間の地区 [研究篇: 258頁]。

123) Buṣarriya. レバノン山脈北部、カーディスイーヤ渓谷最奥部に位置する集落。海拔1400m。アラビア語地誌では Ġubbat Bṣarriya または Bṣarrā と記される [“Bsharrā,” EI2; 研究篇: 258–259頁]。

124) Ġabala. ラーズィキーヤの南にある港市。17/638年にアラブ・ムスリムに征服され、ウマイヤ朝カリフ=ムアーウィヤ1世によって再建される。502/1108年に十字軍に奪取され584/1189年にはサラーフ・アッディーンによって征服されるも、その後再びヨハネ騎士団、テンプル騎士団の所領となる。684/1285年カラーウーンによって征服された [Le Strange 1890: 45–460; Burns 1992: 134–135; 研究篇: 259頁]。

125) Ibrāhīm b. Adham. 8世紀の禁欲家 (110~162/728–29~777年)。ホラーサーン地方バルフの富豪の家に生まれたが、神への帰依に目覚め、私財を捨て放浪の身になったと言われる。ホラーサーンを立出してメッカで学んだ後、シリアやアナトリアでジハードに加わったとされる。その改心の軌跡と数奇な生涯は、後世に「聖者イブラーヒーム伝説」をはじめとする様々な逸話を生み出した [佐藤次高 2001: 第2章; 「イブラーヒーム・ブン・アドハム」『岩波イスラーム辞典』; 研究篇: 259頁]。

126) Anafa. トリポリ南西の海岸にある町 [研究篇: 259頁]。

バトルーン¹²⁷⁾。

ジュバイル¹²⁸⁾。

アルカー¹²⁹⁾。

クライア¹³⁰⁾。

サーフィーター¹³¹⁾。

さらに、おそらく前述の城塞の中にも管轄地を有するものがある。以上がトリポリ地方のすべてである。

サファド地方¹³²⁾

サファド地方については、その南側の境界はヨルダン溪谷で、タバリーヤ¹³³⁾の向こう側のスィンナブラ¹³⁴⁾の橋があるところである。東側の境界はシャキーフ地方とフーラト・バーニヤース¹³⁵⁾を分断している塩湖 (mallāḥa), [txt. 261] 北側の境界はライター川¹³⁶⁾、西側の境界は地中海である。

127) al-Batrūn. アナファとジュバイルの間にある海岸沿いの町 [研究篇：259頁]。

128) Ġubayl. トリポリとバイルートの間にある海岸沿いの町。古代にはビブロス (Byblos) として知られ、商業的・宗教的中心地として栄える。アラブ・ムスリムによる征服後、ウマイヤ朝に再び港市として整備される。496/1103年十字軍によって奪取され、583/1187年サラーフ・アッディーンによって征服されるも、593/1197年十字軍勢力に売却される。665/1266-67年にバイバルスによって再び征服された [Le Strange 1890: 464-465; "Djubayl," EI2; 研究篇：259頁]。

129) 'Arqā. トリポリの北東、アンサーリーヤ山地の麓に位置する城塞 [Le Strange 1890: 397-398]。

130) al-Qulay'a. この地名はアラビア語で「小城塞」を意味し、シリアとレバノンの山岳地帯に同様の地名が複数存在するため、同定は難しい。前後の記述をみると、アナファからジュバイルまではトリポリから近い順に南側に位置する地名があげられているが、アルカーはトリポリの北側にあり、サーフィーターはさらに北に位置する。これらの記述順から、この al-Qulay'a は、アルカーとサーフィーターの間に位置すると推測できる。Dussaud 1927の地図索引には類似の地名が5件 (Qelei'at 2件, Qolei'a 1件, Qoulei'at 2件) 示されているが、上記の推測を当てはめると、ウマリーがあげている al-Qulay'a は、トリポリの北東23km, アルカーの北5km, サーフィーターの南南西28kmに位置する Qoulei'at [Dussaud 1927: CarteV-B-2] (現代の地図では Qulay'at) である可能性が高いと言えよう。

131) Ṣafitā. タルトゥースの東、アンサーリーヤ山地の麓に位置する城塞。十字軍勢力によって領有された主要な城塞の一つ。669/1271年バイバルスによって最終的に征服された [Burns 1992: 208-210]。

132) Bilād Ṣafad.

133) Ṭabariyya. ティベリアス湖西岸に位置する町。87年ヘロデ・アンティパスが首都として建設し、ローマ皇帝ティベリウスにちなんで名付けたと言われる。のちにユダヤ教徒の主要都市となり、タルムード研究の中心地となる。16/635年アラブ・ムスリムに征服される。そののち十字軍の支配下に入るが、583/1187年サラーフ・アッディーンによって征服される。その後再び十字軍勢力の手に落ちるも、645/1247年にはホラズム・シャー軍に征服された [Le Strange 1890: 334-341; "Ṭabariyya," EI2; 研究篇：259-260頁]。

134) al-Ṣinnabra. タバリーヤ近隣、アカバト・アルフィーク ('Aqabat al-Fiq) の向かいに位置する町 [Le Strange 1890: 531; 研究篇：259頁]。

135) Ḥūlat Bāniyās. バーニヤースとスールの間にある地区 [研究篇：260頁]。

136) Nahr Layṭā. スールの北で地中海に注ぎ込む川。リターニー川 (Nahr Liṭāni) とも呼ばれる [Le Strange 1890: 56; 研究篇：260頁]。

この地方の管轄地は以下の通りである。

シャキーフ。これはシャキーフ・カビールで、アルヌーン¹³⁷⁾と呼ばれており、他を圧する揺るぎない城塞である。そこにはワーリーがいる近郊地域がある。

ジーニン¹³⁸⁾管轄地。

アッカー¹³⁹⁾管轄地。ここはかつてはこの地域の海岸部におけるフランクの最も偉大な王の王座であったが、ここが征服されたことによって、フランクの手にそれまで残っていた海岸部の全域が明け渡された。彼らは残らず海へと漕ぎだして去って行った (hağğa)。

ナザレ¹⁴⁰⁾管轄地。そこはキリスト教の揺籃の地 (manša' al-Naṣārā) であり、キリスト教徒 (ahl al-Masiḥīya)¹⁴¹⁾は皆その地を称える¹⁴²⁾。

スール管轄地。古い難攻不落の都市で、柱が立ち並び、建物は堅牢である。比類なき水路がそこまで引かれている。エジプトのカリフ¹⁴³⁾の時代には非常に重要で名の知れた都市であり、優秀な人物を輩出し、優れた人物が現れた¹⁴⁴⁾。そこには教会があり、海の〔向こうのキリスト教徒の〕王たちは、戴冠 (tamalluk) の際にはその教会を目指す。彼らは、そこで戴冠しなければ王権の契約 ('aqd mulk) は正当ではなく、臣従を求める誓約 ('ahd muwattaq tastar'ā bi-hi al-ra'īya) も正当ではないと考えているのである。彼らの宗教の契約は、彼らが武力でスールに入城すべきとしている。このため、そこではそのことを常に監視している。それにもかかわらず、彼らは突然不意に襲撃してくるのである。こういったことが、私たちの時代にも一度ならずあった。彼らは、スールで自分たちの望むことをやって、急いで撤退する〔つもりだったのである〕。しかし、彼らについての報告が監視の当直兵たち (aṣḥāb nawbat al-yazak) のところに届くと、当直兵たちは急いで彼らの許へと向かった。彼らが

137) Arnūn. 本訳119頁注28参照。

138) Ġinīn. ナブルスの北、ティベリアス湖の南西に位置する町 [Le Strange 1890: 464; 研究篇: 260頁]。

139) 'Akkā. ティベリアス湖の西に位置する港市。アラブ・ムスリムによる征服後、ムアウイヤ1世が再建し水軍基地とした。その後イブン・トゥールーンが要塞化、ファーティマ朝においても水軍基地として重要な都市であった。497/1104年十字軍に奪取され、その後長く十字軍勢力の中心的都市となった。583/1187年サラーフ・アッディーンによって征服されるも再び十字軍に奪取される。690/1291年スルターン＝ハリールがこの地を征服したことで、十字軍によるパレスチナ支配が終焉した [Le Strange 1890: 328–334; "Akkā," EI2; 研究篇: 260頁]。

140) al-Nāṣira. イエスが育ち暮らしたことで知られる。サラーフ・アッディーンは、583/1187年にここを征服した。661/1263年、マムルーク朝のスルターン＝バイバルス1世は、この街の破壊を命じた ["al-Nāṣira," EI2]。

141) al-Naṣārā (単数形: al-Naṣrānī) も ahl al-Masiḥīya もともにキリスト教徒のことであるが、前者はイエスの暮らした町の名前ナザレ (al-Nāṣira) に由来する呼称、後者はキリスト (al-Masiḥ) に由来する呼称 ["Naṣārā," EI2]。

142) ベイルート版 [236頁] では、「アッカー管轄地」「ナザレ管轄地」とのみあり、説明の部分は欠落している。この説明文があるのは、S1写本 [f. 173b] と S2写本 [f. 147a] のみ [校訂: 261頁注5]。

143) ファーティマ朝カリフのこと。

144) スール管轄地に関する説明のここまでの部分は、ベイルート版にはない。この部分があるのは、S1写本 [f. 173b] と S2写本 [f. 147a] のみ [校訂: 261頁注5]。

それに成功したという話は、私たちの時代についてもそれ以前についても私は聞いたことがない¹⁴⁵⁾。[txt. 262; ms. 114b]

カラク¹⁴⁶⁾

カラク・アッシャウバク (Karak al-Šawbak) という名前で知られている。南の境界はアカバト・アッサワーン¹⁴⁷⁾、東の境界はバルカー地方、北の境界はソドムの湖¹⁴⁸⁾、つまりムンティナ (al-Muntina) とカロトの湖 (Buḥayrat Lūt) の名前で知られている湖であり、西の境界はイスラエルの民の荒野である。

カラクは、イスラームの砦であり、イスラームと平安の避難場所である。マリク・アーディル・ブン・アイユーブ¹⁴⁹⁾が建設し、建物を建て、中庭を広げた¹⁵⁰⁾。そこは、かつて修道士のための修道院であった。その修道士たちは、そこで船を建造し、高貴なるヒジャーズを目指すべく、紅海へとそれらを運んだ。それは、心の命ずるままに〔悪〕事をなすためである。そして神は彼らに正しき決定、公正なる決着をもたらした¹⁵¹⁾。彼らは捕まり、スルターン＝サラーフ・アッディーンが命じて、ミナーに運ばれ、その石投げの石 (ġamarāt al-‘aqaba) の上で屠られた。そこは、犠牲が屠られる場所である¹⁵²⁾。〔アイユーブ朝の〕王たちは〔そういったことが起こるのを〕恐れてカラクをよく整え、自分たちの財産をそこに蓄え、子孫にそこ〔の統治〕を継承させた。

シャウバク¹⁵³⁾は、今ではカラクの附属地の一つではあるが、その城塞には人員が配置され

145) 戴冠にかかわる説明とたびたび襲撃があることについての記述については、ペイルート版 [237頁] は校訂と比べるとかなり簡略であり、「私たちの時代」という表現もみられない。また特に当直兵に関する話はない。写本の多くはペイルート版とほぼ同じであり、S1写本 [ff. 173b-174a] とS2写本 [ff. 147a-147b] のみが校訂と同様である。なお、国王戴冠権は総大司教にあった。総大司教座の一つはエルサレムに置かれており、その下にスール (ティール) の大司教座が置かれていた [櫻井康人 2002: 146-147頁]。

146) al-Karak.

147) ‘Aqabat al-Šawān. Ma‘ān から砂漠へ続く道 [Le Strange 1890: 509]。

148) Buḥayrat Sadūm. Buḥayrat Sadūm wa Ġamūr (ソドムとゴモラの湖) に同じ。死海のこと。他に、Buḥayrat al-Muntina (悪臭の湖)、Buḥayrat Zugar (ズガル (ロトの息子) の湖)、Buḥayrat al-Maqlūba (神に沈められた湖) などとも呼ばれた [Le Strange 1890: 64-67]。

149) al-Malik al-‘Ādil b. Ayyūb. アイユーブ朝君主。エジプトのスルターン (在位596~615/1200~1218年)。

150) カラクは、584/1188年、フランクの手からアーディルの手にわたった。その後もアイユーブ家の者たちの支配のもとにあったが、最終的には661/1263年、バイバルス1世の時にマムルーク朝による直接統治下に組み込まれた [“al-Karak,” EI2; Milwright 2008: 37-40]。

151) 「正しき (ṣalāḥiyya) 決定」「公正なる (‘ādiliyya) 決着」という表現は、それぞれ、サラーフ・アッディーンとアーディルという名前に重ねられている。

152) 578/1182-83年、当時カラクを治めていたルノー・ド・シャティヨン (1187年没) は、カラクで造った船を分解してアイラに運んで組み立て、一部の船でアイラ要塞を包囲させた。さらに残りをメッカに向かわせたが、その途中、アイザーブにおいて、アーディルによって派遣されたフサム・アッディーン・ルールーによって撃破された。この一連の戦いの中で捕虜とされた者たちは、メッカ、カイロなどへ運ばれて処刑された [Kāmil, v. 11: 490-491; Milwright 2008: 31, 34-35, 37]。

153) al-Šawbak. 509/1115年、イェルサレム王ボードワン1世 (在位1100-1118年) がここに城塞

ておらず、城門は閉ざされている。しかし、城塞のワーリーの職位はあり、そのワーリー職にある者はスルターンの権威のもとにある。ただし、カラクで統治している者に指示を仰ぐ。

カラクにはその地方を管轄する近郊のワーリー職 (wilāyat barr) がある。バルカーは、カラクに附属する時もあれば、そうでない時もある。今日はカラクから離れ、カラクとともにではなくダマスカスとともにある。

特に述べるべき所で残っている所について言えば、それはアレppo州に続く所、[txt. 263] すなわち、[ms. 115a] ジャイハーン川流域征服地 (al-Futūḥāt al-Ġahāniya) である。ここでそれを扱うのは、そこについて述べるべき関連する州がないからである。そこはシリア地方 (al-Šāmāt) には全く含まれておらず、古くはアワースィム地方とかスグール地方と呼ばれたアルメニア人の国の一部である。そこの征服は最近のことで、ヒムスと同様に栄光に満ちたナーイブ管区とされ、その権限はシリアのナーイブ職のもとに置かれた。その後、アレppo [のナーイブ職] のもとに置かれ、今日までその権限 [がどこに置かれるか] は揺れ動いている。

その南の境界は海である。東はアレppo地方であり、バープ・イスカンダルーナ¹⁵⁴⁾で [境を接する]。北はジャイハーン川で、その地とドゥループ地方を隔てている。西はアルメニア人の掌中にとどまっている地域であり、その首邑はアーヤース¹⁵⁵⁾である。そこにある数多くの城塞は、征服の際に破壊された。それらのうち最も栄光に満ちた城塞はカーワララ¹⁵⁶⁾であり、その他はナジュマ¹⁵⁷⁾、タッル・ハムドゥーン¹⁵⁸⁾、フマイミス¹⁵⁹⁾、二つのハールーニー

の建設を命じた。585/1189年、サラーフ・アッディーンが攻略した。紅海へと出る交通の要衝であるとともに水場に恵まれ、アイユブ朝期によく発展した。マムルーク朝初期の648/1250年から659/1261年まではアイユブ家のムギース・ウマルの統治するところであったが、その後マムルーク朝の派遣する総督のもとに移った。城塞は、692/1292年にスルターン=アシュラフ・ハリールの命令で取り壊されたが、その後、697/1297-98年に再建された。718/1318年に地震と洪水に見舞われており、『高貴なる用語』本文にあるように城塞が閉ざされることになったのは、おそらくはこのためと思われる [“al-Shawbak,” EI2]。

154) Bāb Iskandarūna. アマヌス山脈の村バイラーン (Baylān) のこと [Hartmann 1916: 39; “Baylān,” EI2]。

155) Āyās. 訳注 (2) 85頁注215参照。

156) Kāwarrā. アーヤースの北、1時間の行程にあり、海に面した山の上に位置した [Šubḥ, v. 4: 135]。

157) Nağma. マクリーズィーが Qal’at Nağīma (Nuğayma) と呼ぶ城塞を指すと考えられる [Hartmann 1916: 40; Sulūk, v. 1: 839, 840]。マクリーズィーが依拠したのはヌワイリー (677~733/1279~1333年) である [Nihāya/Nuwayrī, v. 31: 340]。一方、バイバルス・マンズーリー (725/1325年没) および彼の記述を引用したアイニー (762~855/1361~1451年) は、同城塞を Qal’at Nağm と記す [Zubdat al-fikra: 317; ‘Iqd al-ğumān, v. 3: 387]。

158) Tall Ḥamdūn. アーヤースから1日、スイスから2日の行程にあり、ジャイハーン川の南に位置した [Šubḥ, v. 4: 136; Le Strange 1890: 543]。

159) Humaymīš. タッル・ハムドゥーンの東にあったとされる Ḥamūš におそらく同定できるといふ [Hartmann 1916: 40; Le Strange 1890: 543]。

ヤ¹⁶⁰である。二つのハールーニーヤは、ハールーン・ラシード¹⁶¹が建てた二つの砦であり、残りはマームーン¹⁶²の建設による。

以上で、エジプトとシリア、およびそれらとともにあるイスラーム王国¹⁶³全土の領域の説明を終える。ただし、ヒジャーズは除く。それはアラビア半島の一部であり、その支配権は掌握されておらず、その保護に注意が向けられていないからである。諸州の境界のうち特に重要なものについては、書簡の書式のところで¹⁶⁴既に述べた。それで十分である。神はその恩顧と寛大さによって成功をもたらす方である。

[txt. 264]

第6章 宿駅と伝書鳩の拠点、氷雪を運搬するラクダと船の拠点、烽火台、焼却場

[txt. 265; ms. 115b]

以下のことを知るように。規定された1 駅程 (barid) は、4 ファルサフ (farsah) である。1 ファルサフは3 ミール (mil) であり、1 ミールは3000ハースミー・ズイラー¹⁶⁵であり、1 ズイラーは24イスバー (iṣba') である¹⁶⁶。1 イスバーは、6 シャイーラ (ša'ira) であり、1 シャイーラは大麦1粒の背から腹まで〔の厚み〕であり、ラバの尻尾の毛4本分¹⁶⁷である。これがすべての基礎をなしている規定された駅程である。

しかし今日、宿駅はこの基準に則ってではなく、さまざまな距離で配置されている。水場

160) al-Hārūniya. ルッカーム山 (Ġabal al-Lukkām) の西に位置し、183/799年に建設された [Le Strange 1890: 449–450]。

161) Hārūn al-Raṣīd. アッバース朝カリフ。在位170～193/786～809年。

162) al-Ma'mūn. アッバース朝カリフ。在位198～218/813～833年。なお、訳注(7) 11頁注41では、即位年のヒジュラ暦が誤って189年となっている。

163) al-Mamālik al-Islāmiya. マムルーク朝を指す。

164) 『高貴なる用語の解説』第1章「書簡のやり取りに関する規則」(訳注(1)–(3))を指す。

165) *dirā' bi-al-Hāšimī*. アッバース朝カリフ＝マンスールの治世(136～158/754～775年)に、「王のズイラー (*dirā' al-malik*)」という単位の名称がそのように変わったという [Hinz 1970: 58, 59]。ハースミーとは、アッバース家が属していたハースム家のことである [Sauvaget 1941: 28, n. 121]。

166) 以上の長さの単位については、Hinz 1970を参照のこと。1 ファルサフは約6 km である [Hinz 1970: 62]。なお、barid という語は、制度を指して用いられている場合は「駅通」、駅間距離という意味の場合は「駅程」と訳した。

167) 校訂では、カルカシャンディーの記述 [Subh, v. 14: 366] に基づいて、「7本分」としているが、7と記す『高貴なる用語の解説』写本は存在しない。数字が欠落しているか(L写本(底本)、D2写本 [f. 106b], Ld写本 [f. 75b], S1写本 [f. 175a], Sh写本 [f. 143a]), 6と記されているか(F写本 [f. 118a], S2写本 [f. 148b]), 4と記されている(B写本 [f. 89a], D1写本 [f. 166b])。バイルート版も4とする[239頁]。4 (arba') は7 (sab') と見間違われる可能性があること、4と記す写本の筆写年が比較的古いこと(B写本が872/1468年、D1写本が764/1363年にそれぞれ筆写されている)から、ここでは「4本分」と解した。なお、ハリール・ブン・シャーヒーン・ザーヒリー(813～873/1410～1468年)は、1 シャイーラをラバの尻尾の毛6本分と記すが、その一方で1 駅程を2 ファルサフとしており [Zubdat kaṣf: 118]、彼が依拠したのがウマリーないしカルカシャンディーなのか、それとも別の情報源なのか判然としない。したがって、彼の記述を根拠にウマリーの記述を推定することはできない。

が遠いとか、村落と近いとかいった理由で、そうせざるを得ないからである。したがって、〔規定上の〕1 駅程として〔実際には〕2 駅程分の宿駅が見られることもある。規定に従っていけば、〔このような〕違いはないはずなのであるが。

駅通は、既にキスラーたちやカエサルたちの時代に存在した。しかし私は、それがどちらであったか〔すなわち、規定に従っていたのか、そうではなかったのか〕を知らない。ただし、私には〔彼らが〕規定に従っていたとしか思われぬ。彼らの知恵が、それ以外のことは拒んだであろうからである。

イスラームにおいて駅通を設置した最初の者は、ムアーウィヤ・ブン・アビー・スフヤーン¹⁶⁸⁾——神が彼に満足せんことを——である。それは信徒の長アリー・ブン・アビー・ターリブ——〔神が〕彼の顔を気高くせんことを——が死に、アリーの息子ハサン——神が二人に満足せんことを——が降伏し、ムアーウィヤが苦闘から解放されて彼のカリフ位が確定した時のことであった。ムアーウィヤは、各地の情報が隔々から彼の許へ早く届くように、駅通を設置した。彼はペルシア (al-Furs) の地主たち¹⁶⁹⁾と旧ビザンツ領 (a'māl al-Rūm) の人々を連れてくるように命じ、彼が意図していることを伝えた。そこで彼らは、ムアーウィヤのために駅通を設置し、〔txt. 266〕駅通の旅に必要な荷鞍をつけたラバを用意した。

しかしこうしたことが行われたのは、アブド・アルマリク・ブン・マルワーン¹⁷⁰⁾の治世において、彼が反乱者たち〔の脅威〕から解放された時だとも言われている。反乱者とはすなわちアムル・ブン・サイド・アシュダク¹⁷¹⁾や、〔ms. 116a〕アブド・アッラー・ブン・アッズバイル¹⁷²⁾や、ムスアブ・ブン・アッズバイル¹⁷³⁾や、ムフタール・ブン・アビー・ウバイ

168) Mu'āwīya b. Abī Sufyān. ウマイヤ朝初代カリフ。在位41~60/661~680年。アリーの死によって実質的にカリフ位を手中に収め、ウマイヤ朝を開いた。アリーの死後、カリフ位をめぐるムアーウィヤと争うハサンに対して、年金と引き換えにカリフ継承権を放棄させ、王朝を盤石のものとした [“Mu'āwīya I,” EI2]。

169) dihqān. イスラーム以前の下級の在地貴族や在地地主などを指す。アラブによる征服以降もイスラームへの改宗によって共同体とその權益を維持した [“Dihqān,” EI2]。

170) 'Abd al-Malik b. Marwān. ウマイヤ朝第5代カリフ。在位65~86/685~705年。第2次内乱など相次いで起こった反乱を治め、ウマイヤ朝の版図を再統一した [「アブドゥルマリク」『岩波イスラーム辞典』]。

171) 'Amr b. Sa'īd al-Ašdaq. アブド・アルマリク治世下で反乱を起こした人物の一人。ムアーウィヤ治世下ではメッカ総督を務めるなど古くからウマイヤ朝に仕えていた。ウマイヤ家の一門であったこともありシリアで支持を集め、69/689年にカリフが遠征で不在の間にダマスカスを占拠して自身のカリフ位を主張した。帰還したアブド・アルマリクによって、翌年処刑される [“Amr b. Sa'īd,” EI2]。

172) 'Abd Allāh b. al-Zubayr. ウマイヤ家のカリフ位世襲を認めず、ムアーウィヤ2世 (Mu'āwīya b. Yazīd) 即位 (64/683年) を受けて自らもメッカでカリフを名乗り、ウマイヤ朝に対抗した人物。一時はウマイヤ朝版図の過半を支配するも、アブド・アルマリク治世下に派遣されたハッジージュ (Ḥaǧǧāǧ b. Yūsuf) によって73/692年討伐される [「イブン・ズバイル」『岩波イスラーム辞典』]。

173) Muṣ'ab b. al-Zubayr. 前掲注172のイブン・アッズバイルの異母弟。67/686年からは兄によってバスラ総督に任命され、ムフタールの乱を鎮圧するなど活躍する。しかし晩年は、実質的なイラクの支配者となった彼を警戒した兄と対立し孤立した。72/691年アブド・アルマリクとの戦いで戦死 [“Muṣ'ab b. al-Zubayr,” EI2]。

ド¹⁷⁴⁾といった者たちのことである。

ワリード・ブン・アブド・アルマリク¹⁷⁵⁾はコンスタンティノープルからダマスカスに届けられた金色のモザイク片を、駅通を通じて運ばせ、ダマスカス、メッカ、メディナ、高貴なるエルサレムの各金曜モスク (masǧid ġami‘) の壁をそのモザイクで覆ったのである。しかし今日では以下のもの以外は残っていない。すなわち、ダマスカスの金曜モスク (ウマイヤ・モスク) において中庭や天蓋とその周囲に〔残っている〕もの、メッカ〔の聖モスク〕ではバヌー・シャイバ門¹⁷⁶⁾やアジャラの館¹⁷⁷⁾に隣接するマフディーが拡張した区域で、今日に至るまで彼の名が記されているところ¹⁷⁸⁾に残っているもの、そして聖なる岩のドーム (Qubbat al-Şaġra) と、アクサー・モスク (al-Aqṣā) の南側のミフラーブに残っているものである。その他のものはなくなっている。

ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズ¹⁷⁹⁾——神が彼に慈悲をかけんことを——は、預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——への平安と祝福を祈願するために、駅通を用いていた。

それからも、マルワーン朝¹⁸⁰⁾の土台が崩壊しその王朝の紐帯が解ける時を迎えるまで、駅通は存続し使われ続けていた。しかし人々が、アッバース朝の支持者たちの方へなびいたために、ホラーサーンとイラクの間〔の駅通〕は絶たれたのである。

その後こうした状態は続き、ついにウマイヤ家最後のカリフであるマルワーン・ブン・ム

174) al-Muġtār b. Abī ‘Ubayd. 前掲注172のイブン・アズバイルによるカリフ位僭称中、クーファで起こった親アリー派による反乱の首謀者。一時はイラクとジャズィーラの大半を支配するも、67/686年には前掲注173のムスアブの攻撃を受けて大敗を喫し戦死した [「ムフタルの乱」『岩波イスラーム辞典』]。

175) al-Walid b. ‘Abd al-Malik. ウマイヤ朝第6代カリフ。ワリード1世。在位86~96/705~715年。

176) Bāb Banī Šayba. メッカの聖モスクの、主要な門の一つ。巡礼者は始めにこの門を通してカーバに達した。この名称は、カーバの守護者として扉の鍵を持ち神殿の管理を担ったシャイバ族 (Banū Šayba) に由来する [“Shayba,” EI2]。

177) Dār al-‘Aġala. 聖モスクの周辺に隣接する多くの館のうちの一つ。メッカにクライシュ族によって建てられた最初の館とも言われる [“Dār al-‘Aġala,” *Buldān*]. そこには聖モスクに通じる門の一つがあり、バヌー・シャイバ門同様、聖モスクの入り口の目印となっていた [*Ibn Ġubayr*: 104, 105; イブン・ジュバイル: 79, 81頁]。

178) アッバース朝第3代カリフのマフディー (在位158~169/775~785年) は、聖モスクの拡張を行ったことで知られている [*Aġbār Makka*, v. 2: 74–81]。579/1183年にメッカを訪れたイブン・ジュバイルも聖モスクの拡張をマフディーの功績として称えており、彼の名が記されていることについて記録を残している。「私は西から北にかけての方向の回廊の壁の上部に『神の僕にして、信者らの長、ムハンマド・アルマフディー——神よ、彼を嘉し給へ——が167年カアバへの大巡礼と小巡礼を行なう者たちのために聖域モスクを拡張するのを命じた』とあるのを見た」 [*Ibn Ġubayr*: 91; イブン・ジュバイル: 65頁 (訳文は「イブン・ジュバイル」による)]。

179) ‘Umar b. ‘Abd al-‘Azīz. ウマイヤ朝第8代カリフ。ウマル2世。在位99~101/717~720年。

180) al-Dawla al-Marwāniya. ウマイヤ朝においてスフヤーン家出身である最初の3代のカリフの時代をスフヤーン朝と呼ぶのに対し、それ以降第14代のマルワーン2世にまで至るマルワーン家出身カリフの時代をマルワーン朝と呼ぶ。

ハンマド¹⁸¹⁾の治世が終わった。そしてサフアーフ¹⁸²⁾、次いでマンスール¹⁸³⁾、次いでマフディーが支配者となったが、駅通のために鞍が置かれることも、駄獣に鞍が取付けられることもなかった。やがてマフディーが、[txt. 267] 彼の息子ハールーン・ラシードをルームの地へのガズワに差し向けた。彼はラシードについて常に最新の情報を知りたいと思い、自分と息子の野営地の間に駅通を設置した。それが、彼に息子の情報をもたらし、日々新たに変わる戦況を知らせていたのである。

ラシードが帰還すると、マフディーはこれらの駅通を止めた。マフディーの残りの治世および彼の後のムサー・ハーディー¹⁸⁴⁾のカリフ在位期も事態はそのままであった。

ハールーン・ラシードがカリフ位にあったとき、ある日彼は、かつて自分〔の野営地〕と父との間に設置されていた駅通について、父が為した素晴らしいことを思い出して語った。するとヤフヤー・ブン・ハーリド¹⁸⁵⁾は、彼に [ms. 116b] 「もしも信徒の長がかつてあったように駅通を運営するようお命じになるならば、それは王権にとって良きものとなるでしょう」と言った。そこでラシードはそれを彼に命じた。ヤフヤー・ブン・ハーリドは駅通の運営を立案し、ウマイヤ家の時代にあったようにそれを整え、宿駅にラバを置いた。駅通はカリフまたは情報収集官¹⁸⁶⁾だけが利用した。その後、このような状態が続いた。

マームーンがルームの地に入り、夏の暑い時期にバラダーン川¹⁸⁷⁾の岸に下馬したとき、彼は川の岸に座って両足をその中に浸け、川の水を飲んだ。彼は水が甘く、冷たく、美味しいと感じ、側にいる者に「この水を飲むときに〔口にすることで〕最も良いものは何か」と言った。すると、各人がそれぞれの意見を言ったので、マームーンは「この水を飲むときに〔口にすることで〕最も良いものは、アザーズ・ナツメヤシ¹⁸⁸⁾である」と言った。そこで、側にいる者たちは「信徒の長は、無事にイラクへ至り、そこでアザーズ・ナツメヤシを召し

181) Marwān b. Muḥammad. ウマイヤ朝第14代カリフ。マルワーン2世。在位127~132/744~750年。

182) al-Saffāḥ. アッバース朝初代カリフ。在位132~136/749~754年。

183) al-Manṣūr. アッバース朝第2代カリフ。在位136~158/754~775年。

184) Mūsā al-Hādī. アッバース朝カリフ。在位169~170/785~786年。

185) Yaḥyā b. Ḥalid. 8世紀後半から9世紀初頭にかけてアッバース朝下で栄華を極めたバルマク家の人物。ラシードのワズィールとして権勢を誇ったが、187/803年にラシードはバルマク家の粛清を断行し、190/805年ヤフヤーは獄中で没した [「バルマク家」『岩波イスラーム辞典』: “al-Baramika,” EI2]。

186) ṣāhib al-ḥabar. 各種情報収集に携わる職。アッバース朝では遅くとも9世紀半ばには存在していたことが確認できる [Silverstein 2007: 114]。

187) Nahr al-Bardūn(?). キリキア地方を流れる川。初期イスラーム時代に重要な辺境防衛拠点であったタルスースはこの川沿いに位置していた [太田敬子2009: 88-89頁; “Ṭarsūs,” EI2]。なお、ウマリーはこの川の名を al-b-r-d-w-n と綴っているが、本訳ではよく知られている al-Baradān という名称を用いる。

188) ruṭab azād. ruṭab は熟したナツメヤシの実で新鮮なものをいう [Lane: 1101]。これを乾燥させたものが通常食される tamr である。azād はイランの地名に由来するとも考えられるが、正確な地名と位置は不明である [研究篇: 264頁]。Dozy はペルシア語の azād に由来するとし、ruṭab azād を excellente espèce de dattes (高級ナツメヤシ) と訳している [Dozy, v. 1: 19]。azād には「高貴な」という意味がある [Mo‘īn, v. 1: 45]。

上がってください」と彼に言った。すると、彼らの言葉が終わるや否や、馱運のラバがアザーズ・ナツメヤシを含む素晴らしい品々を運んでやって来たのである。〔txt. 268〕マームーンの許にそのナツメヤシがもたらされ、彼はそれを存分に食べ、件の水を飲み、満足した。不可能だと思われたにもかかわらず、居場所を出立しないうちにマームーンが望みを達成したので、居合わせた者たちは彼の幸運に驚いた。しかし、マームーンはその場所から出立しないうちに高熱を出してしまい、それが原因で亡くなったのである¹⁸⁹⁾。

ブワイフ家は馱運を止め、〔アッバース朝〕カリフ政権の上に立ち、それを支配するに至った。彼らは、馱運を止めることによって、自分たちがバグダードを目指す時に自分たちの情報と行動をカリフから隠すことを意図したのであり、カリフが不意を突かれて彼らに捕らえられるということが続いた。

セルジューク朝の諸王も同様であった。イスラームの諸王にとって、彼らどうしの不和と争いが関心事であった。彼らの間では、各地でその土地に応じて馬、ラバ、ラクダに騎乗する使者だけを用いた。

ザンギー朝 (al-Dawla al-Zankiya) になると、このために早馬 (nağğāba) を置き、そのために選りすぐりの良い馬を用意した。〔txt. 269; ms. 117a〕ザンギー朝時代とアイユーブ家——神が彼らに慈悲をかけんことを——の時代を通じて、アイユーブ家の日々が終わり彼らの足元が崩れ落ちるまでこのようであり続けた¹⁹⁰⁾。

マムルーク朝 (al-Dawla al-Turkiya) の初期も引き続きこのようであった。そして、マリク・ザーヒル・バイバルス¹⁹¹⁾——神が彼に慈悲をかけんことを——に王権が至り、エジプト、シリア、ユーフラテス川に至るアレppo〔地方〕の王権が彼の下に統合された。彼はダマスカスに〔地方〕政府 (dawla) を置こうと考え、そこにナーイブ、ワズィール、カーディー、文書庁書記を任命した。

我がおじ、サーヒブ・シャラフ・アッディーン・アブー・ムハンマド・アブド・アルワッハブ——神が彼に慈悲をかけんことを——がその文書庁書記であった¹⁹²⁾。彼が出立の挨拶のためにバイバルスの許に参上したとき、バイバルスは彼に多くの指示を与えた。最も肝要とされる指示 (akad-hā) は、継続的に情報を伝えること、そしてタタール¹⁹³⁾とフランク人の情報を常に更新することであった。バイバルスは彼に「毎晩、夜を過ごすときにも、また朝を迎えるときにも、私が必ず情報が得られるようにお前ができるなら、そうしてくれ」と言った。そこで彼は最初の頃の、そしてカリフの時代の馱運の状況を披瀝し、バイバルスに

189) マームーンの最期に関する以上の逸話については、*Tabarī* [III : 1134] に詳しい記述がある。また、この遠征を含むマームーンの対ビザンツ帝国政策については、太田敬子2009 [114-117頁] を参照せよ。

190) ウマリーによる上記のバリード史概観には、各時代の史料にみられる情報とは食い違う記述が含まれていることに注意しなくてはならない [Silverstein 2007: 53-54]。

191) al-Malik al-Zāhir Baybars. マムルーク朝スルターン。在位658~676/1260~1277年。

192) この人物については、訳注 (10) 36頁注37を参照せよ。

193) al-Tatar. イル・ハーン朝を指す。訳注 (3) 28頁注58を参照せよ。

〔駅通の設置を〕提案した。すると、良いものだと思われたので、バイバルスはそれを命じた。我がおじは「私はバイバルスの目の前でその任に就けられたのだ」と言った。またイブン・アッスダイド (Ibn al-Sudayd) の名で知られているジャマール・アッディーン・アブド・アッラー・ダワーダリー・バリーディー¹⁹⁴⁾が我がおじからの〔伝として〕そのことを細大漏らさず私に語った。彼こそは、折られることのないイスラームの翼、また切られることのない翼の先端として、現在その任にある者である。

さて、イスラーム王国における駅通の宿駅について述べよう。エジプトから始める。まずカルアト・アルジャバル¹⁹⁵⁾——〔神の〕保護があらんことを——の宿駅からエジプトの各地方 (nawāḥi-hā al-ḥāṣṣa bi-hā) へと至るものを〔述べる〕が、それは三つの方面から成る。クースを経由してアスワンへと至る方面と、アレクサンドリアへ至る方面、そしてディムヤートへと至る方面である。それからそのあとに [txt. 270; ms. 117b] カルアト〔・アルジャバル〕の宿駅から保護されし王国の東の果てのユーフラテス川に至るまでの〔駅通〕について述べる。

エジプト各地方へ至る〔道程は以下のとおりである〕。カルアト〔・アルジャバル〕の宿駅からギザまで、さらにそこからザーウィヤト・ウンム・フサイン¹⁹⁶⁾、そしてミンヤト・アルカーイド¹⁹⁷⁾へと至る。ミンヤト・アルカーイドは、現在は宿駅である。さらにそこからワナー¹⁹⁸⁾、そこからババー¹⁹⁹⁾、さらにダフルート²⁰⁰⁾へ至る。またそこからイクルスナー²⁰¹⁾、ミンヤト・イブン・ハスィーブ²⁰²⁾へと至る。ミンヤト・イブン・ハスィーブはナイル川岸の風光明媚な町で、マドラサや公衆浴場があり市場も小さくない。ハスィーブ²⁰³⁾は、総督としてエジプトを治めていた時代に、この町を息子のために創建し、息子の名をつけた。そこでこの名で知られるようになったと言われている。同地にはナイル川にそのアーチが面している

194) Ġamāl al-Dīn ‘Abd Allāh al-Dawādārī al-Barīdī. マムルーク朝の高官と思われる。719/1319–20年にスルターン＝ナスィル・ムハンマドが彼をアブー・アルフィダーの許に遣わしたという記述が残っている [研究篇：264頁；*Baṣar*, v. 4: 85]。

195) Qal‘at al-Ġabal (山の城塞). アイユブ朝のサラーフ・アッディーンによってカイロ旧市街東側にあるムカッタムの丘に建設された城塞 [佐藤次高 1996：122頁]。

196) Zāwiyat Umm Ḥusayn. エジプトのギザ (Ġiza) 地方の村。ザーウィヤト・アビー・スワイリム (Zāwiyat Abī Suwaylim) とも呼ばれる [研究篇：265頁]。

197) Minyat al-Qā‘id. 上エジプトのギザ地方の村 [研究篇：265頁]。

198) Wanā. 上エジプトのバニー・スワイフ (Banī Suwayf) 地方の村 [研究篇：265頁]。

199) Babā. 上エジプトのバニー・スワイフ地方の村 [研究篇：265頁]。

200) Dahrūt. 上エジプトのミンヤ (Mīnya) 地方の村 [研究篇：265頁]。

201) Iqlūsā. 現在はクルーサナー (Qulūsānā) の名で知られている。上エジプトのミンヤ地方の村 [研究篇：265頁；*Ramzī*, v.2: 25]。

202) Minyat Ibn Ḥaṣīb. 上エジプトのミンヤ地方の中心都市 [研究篇：265–266頁]。

203) al-Ḥaṣīb. アッバース朝ラシードの治世 (170–193/786–803年) にエジプト総督に任命されたハスィーブ・ブン・アブド・アルハミード (al-Ḥaṣīb b. ‘Abd al-Ḥamīd) を指す。イブン・バットゥータは『大旅行記』において、ミンヤ・ブン・ハスィーブ滞在の記述に、カリフ＝ラシードに目を刮り抜かれたハスィーブに詩人アブー・ヌワースが頌詩を献じた挿話を添えている [“Ibn al-Khaṣīb,” EI2；大旅行記：1巻106–108, 170頁]。

カーミー館²⁰⁴⁾があり、カーミー館とナイル川との間を、真ん中にある広場が分けている。この広場は見晴らしがよい。ミンヤト・イブン・ハスィーブからウシュムーナインに至る。それは上エジプトの町の一つで、前述したように²⁰⁵⁾ワーリーの居所がそこにある。さらにそこからズイルワト・サラヤーム²⁰⁶⁾へと至る。同地はシャリーフ・ヒスン・アッディーン・ブン・サーラブ²⁰⁷⁾にちなんでズイルワト・アッシャリーフと呼ばれているが、それは、かつてそこが彼が滞在した地で、彼の城や館があったからである。彼は出撃して上エジプトを支配した。エジプトの諸王は彼に敵わなかった。そしてヒスン・アッディーンはムイッズ・アイバク²⁰⁸⁾及び彼の後の者の治世において安全保障を得た。〔スルターンたちは〕彼に勝てなかったが、〔txt. 271〕そののち、ザーヒル・バイバルスが彼を欺き、〔上エジプトの〕代替地としてアレクサンドリアを望むよう仕向けた。そこで彼は同地のナーイブに任命されたとき、爪と犬歯を矯められた状態でアレクサンドリアを支配すべく送り出され、それから同地の門に吊るされた。

このズイルワはナイル川のマンハー運河 (Baḥr al-Manhā) への分流点の岸にある。〔マンハー運河とは〕ファイユームへと分流するユースフ運河 (al-Baḥr al-Yūsufi) のことである。ユースフ運河の開削は、ユースフ (ヨセフ) ——彼に平安があらんことを——に帰せられる。そして、ズイルワから〔ms. 118a〕マンファルūt²⁰⁹⁾へと至る。マンファルūtは上エジプトの町で、スルターンの最良のハーツス地 (ḥāṣṣ al-sultān) である。さらにそこからアスユートに至る。アスユートは上エジプトで、税収²¹⁰⁾と外観の上で最良の町である。またアスユートからティマー²¹¹⁾へ、さらにそこからマラーイグとも称される²¹²⁾マラーガ²¹³⁾へと至

204) Rab' al-Karīmī. 「カーミー」とはマムルーク朝スルターン＝ナーシルのハーツス庁長官を務めていたカリーム・アッディーン・ブン・アブド・アルカリーム (723/1323年没) に由来する名称と思われる。カリーム・アッディーンはコプト派キリスト教徒からの改宗ムスリムで、ハーツス庁長官に任ぜられて自身も財を得たが、ナーシルによって逮捕・財産没収されたのちに不審死を遂げた [研究篇：266頁；Little 1998: 244-247]。

205) 「前述」とは、行政区分について説明した本書第5章「各州の領域と、そこに付随する都市、城塞、村落」の上エジプトの記述を指すものと思われるが、該当する箇所はない [訳注 (10)：39-40頁]。

206) Dīrwat Sarayām. 上エジプトの村。ダイラート・シャリーフ (Dayrāt Šarīf) の名でも知られる [研究篇：266頁]。また他にも複数の呼称がある [Hartmann 1916: 482, n.1]。

207) al-Šarīf Ḥiṣn al-Dīn b. Ta'lab. 校訂本には Taglab とあるが、ペイルート版243頁及び諸写本の記述に則り Ta'lab とした。ジャーファル族のアミール。マクラーズィーの記述はウマリーの記述とは異なる。それによると彼は651/1253年に「我らが諸国の主である」と主張して上エジプトの遊牧アラブを率い蜂起した。戦闘ののちにアイバクから安全保障とイクターを得たが、その後、捕らえられアレクサンドリアで処刑された [Sulūk, v.1: 479-480]。

208) al-Mu'izz Aybak. マムルーク朝スルターン。在位648~655/1250~1257年。

209) Manfalūt. 上エジプトのナイル川西岸側にある内陸の町 [“Manfalūt,” *Buldān*]。

210) 校訂では ḡabbāna (平地, 砂漠, 墓地) であるが、ペイルート版244頁の記述に従い ḡibāya (税収) と読んだ。

211) Ṭīmā. 上エジプトのジルジャー (Ġirġā) 地方の町 [研究篇：266頁]。

212) 校訂には s-y-t とあるが、諸写本には summiyat とあるため「称される」と訳した。

213) al-Marāga. 上エジプトのジルジャー地方の町 [研究篇：266頁]。

る。〔そして〕同地からバラスブーラ²¹⁴へ至る。ある者はスイーンをザイーに置き換えて〔バラズブーラと呼んで〕いる。そこからジルジャー²¹⁵に至り、さらにブルヤナ²¹⁶へと至る。またそこからはフーウ²¹⁷に至るが、同地はカウム・アフマル²¹⁸と隣接しており、両方ともスルターンのハーッス地²¹⁹である。この二つ〔の町〕のところで、ナイル川西岸の農耕地域(rif)は途切れ、ハーン・ダンダラーとも称されるダンダラー²²⁰へと砂地が続いていく。そして、このフーウからクースへと至り、またクースからは駅通はラクダに乗ってアスワンやアイザーブやヌビアもしくはその先にあるサワーキン²²¹へと〔向かう〕。

アレクサンドリアへと至る〔道程〕については〔以下の通りである〕。アレクサンドリアへと至るまでの宿駅は二つの道に沿って置かれている。中央の道²²²は人の多く住む地域を通るもので、保護されしカルアト〔・アルジャバル〕の宿駅からカルユーブへと至る。さらにそこからマヌーフへと至る。さらにそこからマハッラへと至るが、これはマハッラト・アルマルフームのことで、ガルビーヤ〔地方〕の首邑である²²³。さらにそこから〔txt. 272〕ナフラーリーヤ²²⁴へと至る。さらにそこからアレクサンドリアへと至る。

もう一つの道は砂漠(barr)を通るもので、ハージル²²⁵道と呼ばれている。これはカルアト〔・アルジャバル〕の宿駅からギザへと至る。さらにそこからジャズイーラト・アルキット²²⁶へと至る。さらにそこからワルダーン²²⁷へと至る。さらにそこからタッラーナ²²⁸へと至る。さらにそこからザーウィヤト・ムバーラク²²⁹へと至る。その地方の民は〔そこを〕アンバーラク(Anbārak)と言っている。さらにそこからブハイラ諸地区の首邑ダマンフル・アルワフシュへと至る。さらにそこからルーキーン²³⁰へと至る。さらにそこからアレクサンドリアへと至る。

-
- 214) Balasbūra. 上エジプトのマラーガとジルジャーの間に位置する町 [研究篇：267頁]。
215) Ġirgā. 上エジプトのジルジャー地方の町で、同地方の中心に当たる [研究篇：267頁]。
216) al-Bulyana. 上エジプトのジルジャー地方の町 [研究篇：267頁]。
217) Hūw. 上エジプトのキナー (Qinā) 地方の町 [研究篇：267頁]。
218) al-Kawm al-Aḥmar. 上エジプトのキナー地方の町 [研究篇：267頁；Ramzī, v. 2: 195]。
219) 校訂には ḥāliṣ とあるが、*Ṣubḥ* の記述に従い、ḥāṣṣ と読んだ [*Ṣubḥ*, v. 14: 374]。
220) Dandarā. 上エジプトのキナー地方の西側に位置する町 [研究篇：267頁]。
221) Sawākin. 紅海に面したスーダン地方の港湾。アイザーブ近郊にある [研究篇：267頁；Ramzī, v. 1: 287]。
222) ここで言う「中央の道」は、後述するディムヤート道（東側ルート）を含めての名称である。
223) 『高貴なる用語』では、通例と異なり、マハッラト・アルマルフームがガルビーヤ地区の首邑とされていることについては、訳注 (10) 41頁注66を参照。
224) al-Naḥririya. ガルビーヤ地方にある村で、現在ではナッハーリーヤ (al-Naḥḥāriya) の名で知られている [研究篇：267頁]。
225) al-Ḥāḡir. ギザ地方にある地名 [研究篇：268頁]。
226) Ġazirat al-Qiṭṭ. ギザ地方にある村 [研究篇：268頁]。
227) Wardān. ギザ地方にある村 [研究篇：268頁]。
228) al-Ṭarrāna. ブハイラ地方にある村 [研究篇：268頁]。
229) Zāwiyat Mubārak. ブハイラ地方にある村 [研究篇：268頁]。
230) Lūqīn. アレクサンドリア近くの村 [研究篇：268頁]。

ディムヤート道については、サイーディーヤ²³¹⁾から分岐している。〔ms. 118b〕サイーディーヤについては後にユーフラテス川へと至る宿駅のところで述べる。そこへ向かう場合は、カルアト〔・アルジャバル〕から、後に述べる宿駅をたどってサイーディーヤへと至る。さらにそこからウシュムーム・アッルンマーンへと至る。さらにそこからディムヤートへと至る。以上で、エジプト地方における宿駅の説明を終える。

231) al-Sa'idiya. ビルバイス近くの村で、現在はイズバト・アッサイディーヤ (Izbat al-Sa'idiya) と呼ばれる [研究篇：268頁]。

参考文献および略称

『高貴なる用語の解説』活字本

al-'Umari, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā b. Faḍl Allāh. *al-Ta'rif bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. (『高貴なる用語』)

校訂：al-Ta'rif bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf l-Ibn Faḍl Allāh al-'Umari. (Vol. 2 of *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh's Manual of Secretaryship "al-Ta'rif bi'l-muṣṭalaḥ al-šarīf"*) Ed. Samir al-Droubi. al-Karak: Mu'ta University, 1992.

ペイルート版：al-Ta'rif bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf. Ed. Muḥammad Ḥusayn Šams al-Dīn. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 1988.

『高貴なる用語の解説』写本

B : Ms. 8639. Deutsche Staatsbibliothek, Berlin.

D1 : Ms. Adab 57. Dār al-Kutub al-Miṣriya, al-Qāhira.

D2 : Ms. Adab 2134. Dār al-Kutub al-Miṣriya, al-Qāhira.

F : Ms. Arabe 5872. Bibliothèque Nationale, Paris.

L : Ms. 659. Karl Marx Universität, Leipzig. (底本)

Ld : Ms. Or. 352. Universiteit Leiden, Leiden.

S1 : Ms. Árabe 1639. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

S2 : Ms. Árabe 1640. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

Sh : Ms. Add. 7466 Rich. British Library, London.

『高貴なる用語の解説』訳注

訳注 (1) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (1)」『史窓』67号 (2010年) : 27-65頁.

訳注 (2) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (2)」『史窓』68号 (2011年) : 51-94頁.

訳注 (3) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (3)」『史窓』69号 (2012年) : 19-53頁.

訳注 (4) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (4)」『史窓』70号 (2013年) : 31-49頁.

訳注 (5) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (5)」『史窓』71号 (2014年) : 1-24頁.

訳注 (6) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (6)」『史窓』72号 (2015年) : 63-79頁.

訳注 (7) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (7)」『史窓』74号 (2017年) : 1-25頁.

訳注 (8) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (8)」『史窓』75号 (2018年) : 23-44頁.

訳注 (9) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (9)」『史窓』76号 (2019年) : 21-51頁.

訳注 (10) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (10)」『史窓』77号 (2020年) : 25-45頁.

辞典類

岩波イスラーム辞典：大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店，2002年.

- 旧約新約聖書大事典：旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』教文館，1989年。
 新イスラム事典：日本イスラム協会ほか監修『新イスラム事典』平凡社，2002年。
- Dozy*: Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2vols. Leyde: E. J. Brill, 1881. Beyrouth: Librairie du Liban, 1981.
- EI2*: Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960–2009.
- Hava*: Hava, J. G. *Al-Faraid*. 1899. Beirut: Dār al-Mašriq, 1982.
- Lane*: Lane, Edward William. *Arabic-English Lexicon*. 8vols. London, 1863–1893. Revised ed. 2vols. 1984. Cambridge: The Islamic Texts Society, 2003.
- Mo'in*: Mo'in, Moḥammad. *Farhang-e fārsī-ye motawasseṭ*. 6vols. Tehrān, 1963–1973. Tehrān: Mo'assese-ye Enteshārāt-e Amīr-e Kabīr, 1997.
- Ramzī*: Ramzī, Muḥammad, *al-Qāmūs al-ġuġrāfī li-l-bilād al-miṣriya*, 6 vols., al-Qāhira: Maṭba'at Dār al-Kutub al-Miṣriya, 1953–1968. al-Qāhira: al-Hay'a al-Miṣriya al-Āmma li-l-Kitāb, 1994.
- 史料・史料訳注**
- イブン・ジュバイル：イブン・ジュバイル『イブン・ジュバイルの旅行記』藤本勝次・池田修監訳，講談社〈講談社学術文庫〉，2009年。
- クルアーン（井筒訳）：『コーラン』井筒俊彦訳，改版。全3冊，岩波書店〈岩波文庫〉，1964年。
- クルアーン（中田ほか訳）：『日亜対訳クルアーン』中田香織・下村佳州紀訳，中田考監修，作品社，2014年。
- クルアーン（藤本ほか訳）：『コーラン』藤本勝次ほか訳。全2冊，中央公論新社〈中公クラシックス〉，2002年。
- クルアーン（三田訳）：『日亜対訳・注解 聖クルアーン』[三田了一訳]，改訂版，日本ムスリム協会，1982年。
- 聖書：『聖書——新共同訳一旧約聖書続編つき——』共同訳聖書実行委員会[訳]。日本聖書協会，1987年。
- 大旅行記：イブン・バットゥータ『大旅行記』イブン・ジュザイイ編，家島彦一訳注，全8巻，平凡社〈東洋文庫〉，1996–2002年。
- ハディース（ブハーリー）：[ブハーリー]『ハディース』牧野信也訳，全6巻，中央公論新社〈中公文庫〉，2001年。
- Aḥbār Makka*: al-Azraqī, Abū al-Walīd Muḥammad b. 'Abd Allāh. *Aḥbār Makka*. Ed. Ruṣdī al-Šāliḥ Malḥas. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Andals, 1983.
- Bašar*: Abū al-Fidā' Ismā'il b. 'Alī al-Ayyūbī. *al-Muḥtaṣar fī aḥbār al-bašar*. 4 vols. al-Qāhira, nd.
- Buldān*: al-Ḥamawī, Šihāb al-Dīn Yāqūt b. 'Abd Allāh. *Mu'ġam al-buldān*. Ed. F. Wüstenfeld. 6vols. Leipzig: Der deutschen morgenländischen Gesellschaft, 1866–1873. Tehrān, 1965.
- Five Years*: Porter, Josias Leslie. *Five Years in Damascus*. 2 vols. London: John Murry, 1855.
- Ibn Ġubayr*: Ibn Ġubayr, Abū al-Ḥasan Muḥammad b. Aḥmad. *Tadkira bi-al-aḥbār 'an ittifaqāt al-asfār (Riḥlat Ibn Ġubayr)*. Ed. William Wright. 1852. 2nd and rev. ed. M. J. De Goeje. Leiden and London: E. J. Brill, 1907. Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1994.
- 'Iqd al-ġumān*: al-'Aynī, Badr al-Dīn Maḥmūd b. Aḥmad. *'Iqd al-ġumān fī ta'riḥ ahl al-zamān*. Ed. M. M. Amin. 5vols. al-Qāhira: al-Hay'a al-Miṣriya al-Āmma li-l-Kitāb, 1987–2009.
- Kāmil*: Ibn al-Aṭīr, 'Izz al-Dīn Abū al-Ḥasan 'Alī b. Muḥammad, *al-Kāmil fī al-tāriḥ*. Ed. Carolus Johannes Tornberg. 14vols. Leiden and Upsala, 1851–1867. 2nd edition. 13 vols. Bayrūt: Dār Šādīr and Dār Bayrūt, 1965–1966.
- Nihāya/Nuwayrī*: al-Nuwayrī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. 'Abd al-Wahhāb, *Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*. 33 vols. al-Qāhira: al-Hay'a al-Miṣriya al-Āmma li-l-Kitāb; Maṭba'at Dār al-Kutub wa

- al-Waṭā'iq al-Qawmiya bi-al-Qāhira, 1923–1997.
- Nuḥba*: al-Dimašqī, Šams al-Dīn Muḥammad b. Abi Ṭālib. *Nuḥbat al-Dahr fi 'ağā'ib al-barr wa-al-baḥr*. Ed. A.F. Mehren. Saint-Petersbourg: Académie Impériale des Sciences, 1866.
- Rawḍatayn*: Abū Šāma, Šihāb al-Dīn 'Abd al-Raḥmān b. Ismā'il. *Kitāb al-Rawḍatayn fi Aḥbār al-Dawlatayn al-Nūriya wa-al-Šalāḥiya*. Ed. Ibrāhīm al-Zībaq. 4 vols. and index volume. Bayrūt: Mu'assasat al-Risāla, 1997.
- Šubḥ*: al-Qalqašandī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. 'Alī. *Šubḥ al-a'šā fi šinā'at al-insā'*. 14 vols. al-Qāhira, 1913–1920. al-Qāhira: Wizārat al-Ṭāqāfa wa-al-Iršād al-Qawmī, 1963.
- Sulūk*: al-Maqrīzī, Taqī al-Dīn Aḥmad b. 'Alī. *Kitāb al-Sulūk li-ma'rifat duwal al-mulūk*. Eds. Muḥammad Muṣṭafā Ziyāda et al. 4vols. 2nd ed. al-Qāhira: Lağnat al-Ta'lif wa-al-Tarğama wa-al-Našr, 1956–1973.
- Ṭabarī*: Ṭabarī, Abū Ġ'far Muḥammad b. Ġarīr. *Ta'riḥ al-rusul wa-al-mulūk*. Eds. Michael Jan de Goeje et al. 15 vols. Leiden: E. J. Brill, 1879–1901.
- Wāfī*: al-Šafadī, Šalāḥ al-Dīn Ḥalīl b. Ayyak. *al-Wāfī bi-al-wafayāt*. Eds. Helmut Ritter et al. 32vols. Wiesbaden: F. Steiner, et al., 1931–2013.
- Zubdat al-fikra*: Baybars al-Manšūrī al-Dawādār. *Zubdat al-fikra fi ta'riḥ al-ḥiğra*. Ed. D. S. Richards. Berlin and Beirut: Das Arabische Buch, 1998.
- Zubdat kašf*: Ḥalīl b. Šāhin al-Zāhirī. *Kitāb Zubdat kašf al-mamālik wa-bayān al-ṭuruq wa-al-masālik*. Ed. Paul Ravaisse. Paris: Imprimerie nationale, 1894. Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1993.

研究

- 梅田輝世 「シャイザルを訪ねて」『梅花短期大学研究紀要』27 (1978) : 41–50頁。
- 太田敬子 『ジハードの町タルスース——イスラーム世界とキリスト教世界の狭間——』（世界史の鏡 都市3）刀水書房, 2009年。
- 櫻井康人 「エルサレム王国における教会形成と王権」『史林』85–2 (2002) : 134–151頁。
- 佐藤次高 『イスラームの「英雄」サラディン——十字軍と戦った男』講談社〈講談社選書メチエ〉, 1996年。
- 佐藤次高 『聖者イブラーヒーム伝説』角川書店〈角川叢書〉, 2001年。
- Burns, Ross. *Monuments of Syria: An Historical Guide*. London and New York: I.B. Tauris & Co Ltd, 1992.
- Cornu, Georgette. *Atlas du monde arabo-islamique à l'époque classique*. Leiden: E. J. Brill, 1985.
- al-Droubi, Samir. *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh's Manual of Secretaryship "al-Ta'rif bi'l-muṣṭalaḥ al-sharīf"*. 2vols. al-Karak: Mu'ta University, 1992. (『高貴なる用語』のテキストが収められている巻は「校訂」、作品研究の巻は「研究篇」と略称。)
- Dussaud, René. *Topographie historique de la Syrie antique et médiévale*. (Haut-commissariat de la République Française en Syrie et au Liban. Service des antiquités et des beaux-arts. Bibliothèque archéologique et historique, t. 4) Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1927.
- Hartmann, Richard. "Politische Geographie des Mamlūkenreichs: Kapitel 5 und 6 des Staatshandbuchs Ibn Faḍlallāh al-'Omari's," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 70 (1916): 1–40, 477–511, 71 (1917): 429–430.
- Hinz, Walther. *Islamische Masse und Gewichte*. Leiden: E. J. Brill, 1970.
- Humphreys, R. Stephen. *From Saladin to the Mongols: the Ayyubids of Damascus, 1193–1260*. Albany: State University of New York Press, 1977.
- Le Strange, Guy. *Palestine under the Moslems: A Description of Syria and the Holy Land from AD. 650 to 1500*. Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1890. New York:

- AMS Press, 1975.
- Little, Donald P. "Notes on the early Naẓar al-khāṣṣ." *The Mamluks in Egyptian Politics and Society*. Ed. T. Philipp and U. Haarmann. Cambridge et al.: Cambridge University Press, 1998: 235–253.
- Milwright, Marcus. *The Fortress of the Raven: Karak in the Middle Islamic Period (1100–1650)*. Leiden: Brill, 2008.
- Sauvaget, Jean. *La poste aux chevaux dans l'empire des Mamelouks*. Paris: Adrien-Maisonneuve, 1941.
- Silverstein, Adam J. *Postal Systems in the Pre-Modern Islamic World*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.